

花葉

2004
No.23



花葉会 発行



花の姿がまるでバラのような
八重咲きのトルコギキョウ。

サカタのタネ 株式会社 サカタのタネ
〒224-0041 横浜南都区仲町台2-7-1
TEL 045-945-8900 (代表)




タネはタキイ

2308 **i70**

「ウインターバンジー」
F1ナチュレシリーズ

寒い冬から春まで咲き続ける
丈夫な小輪バンジー
色彩も豊富に揃い15色となりました。

豊かな地球の明日のために...
TAKI **タキイ種苗株式会社**
本社/京都市下京区瑞小路通南東入 〒600-8586
TEL(075)365-0123(大代) FAX(075)365-0150(代)
支店/札幌・仙台・東京・福岡
農場/富山・北海道・茨城・長野・和歌山 www.tbki.co.jp

F1ナチュレブロンズシェード



ARRANGEMENT Aster®

ミヨシのアレンジメントアスター
は、品種が豊富に揃っています。

セレネ シリーズ
ブチ シリーズ
ハナ シリーズ
ヒメ シリーズ

株 式 会 社 **ミヨシ**

山梨県北巨摩郡小淵沢町上笹尾3181
TEL 0551-36-5911 FAX 0551-36-5900
(株)ミヨシ営業育成センター
HP <http://www.miyosi.co.jp/>

花をより美しく 見せる工夫を

賛 花 園
熱 田 健



オーストリアのチロル州に「アルプバッハ」という村がある。人口2,500人ほどの小さな村であるが、ヨーロッパで最も美しい花飾りの村として、定評がある。8月中旬を過ぎると、村中の家々は花で埋め尽くされる。以前はゼラニウムが主体であったが、現在はアイビーゼラニウムと下垂性のペチュニアが主体である。植えられているプランターは、バルコニーの手摺上部に受け皿を作り、プランター自体は隠れるように置かれる。

このバルコニーであるが、咲き誇る花々をより美しく演出するための特徴的なアイテムとして使われている。手摺用木製部材はトウヒ材で、独特の形に加工され、幼苗期、冬季に植物が植えられていなくても、美しく見ごたえがするデザインである。それらの部材は半完成品のユニットになっていて、ホームセンターや材木店などで常時販売されていて、ユーザーは日曜大工の要領で、この木製バルコニーを作ることが出来る。

これをそのまま日本に導入するのは無理があるかも知

れない。しかし、無理だろうか？

最近のガーデニングブーム以来、花の需要も増え、住宅街に、花が溢れるようになってはきた。問題はその飾り方である。殆どがプラスチックのプランターかポット。ちなみにオーストリア、ドイツでは、それ自体直接目に入らないように工夫が為される。「木の板で囲う」それだけで美観が向上するのを彼らは良く知っている。

味気のないアルミニウムや鉄製の手摺に、それらの木製部材を取り付ける事は簡単である。試みに、我が家のバルコニーに施工して10年になる。夏はペチュニア、冬はパンジーと、年間切れ目なしに美しい花を楽しむ事が出来、道行く人もカメラを向けて行ったりする。口コミで、何カ所か施工したが、いずれも極めて好評である。

折角の花をより美しく観賞させ、楽しませるためのこうした壁面園芸の導入は、やや行き詰まり感のある花の消費、更には街の美化に、何らかの効果を期待出来るのではないだろうか。

花 葉

2004
NO.23

目 次

禁無断転載

私の提案 花をより美しく見せる工夫を……………	熱田 健(1)
「浜名湖花博」の華 ~百華園からの報告~ ……	河合 伸志・掛札 知子(2)
浜名湖花博 園芸文化館	
伝統園芸植物の競演 江戸の粋を集める……………	山口 安久(6)
「草木奇品家雅見」「草木錦葉集」の斑入り植物を展示 ……	横井 政人(9)
園芸文化館見聞録 ……	上田 善弘(10)
浜名湖花博における植物展示……………	山田 達男(11)
女王陛下率いる英国王立園芸協会創立200年記念を迎えて……………	鈴木 邦彦(12)
自叙伝抜粋 花に半世紀を賭ける……………	鶴島 久男(16)
海外園芸事情調査 不思議の島ニュージーランド……………	山口 まり(18)
海外園芸事情調査 イギリス・アイルランドの園芸の粋を訪ねる……………	鈴木 司(21)
園芸古書の解説 ~岩佐蔵書より~ ……	岩佐 吉純(24)
表紙解説 ペチュニア・アルチプラーナ……………	安藤 敏夫(28)
有限会社グリーンアトリエひらきゅうの挑戦……………	平間 拓也(34)
新潟県における花卉園芸の歴史……………	倉重 祐二(38)
住宅産業に花を……………	磯谷 悦久(42)
切花生産者をめざして ~新規就農の挑戦~ ……	村田 一政(46)
「2004花葉サマーセミナー」レポート……………	久保田芳久(52)
花葉会総会(55)	花葉会会則・役員名簿(57)
花葉会賞受賞者紹介(58)	花葉会賞受賞記念講演(61)
会員名簿の追加と訂正(62)	

「浜名湖花博」の華

～百華園からの報告～

株式会社 グリーンダイナミクス

河合伸志
掛札知子

「浜名湖花博」に携わる

しずおか国際園芸博覧会「パシフィックフローラ2004」(愛称「浜名湖花博」)は、平成16年4月8日から10月11日までの187日間、『花・緑・水～新たな暮らしの創造』をテーマに、「浜名湖ガーデンパーク」で開催されました。

1990年の「国際花と緑の博覧会」(通称「花の万博」)、2000年の「国際園芸・造園博 ジャパンフローラ2000」(愛称「淡路花博」)に続き、日本では3回目の国際園芸博覧会です。

この博覧会では、当社の賀来宏和(千葉大学園芸学部昭和54年院修了)が、「浜名湖花博」の総合プロデューサーを務めたほか、500万株に及ぶ植物の調達監理、「園芸文化館」「百華園」などの展示企画とその運営、屋内外にわたる出展作品の動員や調整、さらには、園芸博覧会の中心競技であるコンテストの企画、運営など、まさに、社をあげて取り組む機会を得ました。

ここでは、その「浜名湖花博」の華ともいふべき、「百華園」の舞台裏をご紹介します。

「百華園」とは

会期中約6000品種にも及ぶ植物が植栽され、花や緑で埋め尽くされた「浜名湖花博」。その中でも、特に植物の展示にこだわったエリアが「百華園」です。

ここは、植物に関する「生きた百科事典」といわれるように、多品種の収集を目指した植物コレクション園です。その広さは約3ha、うち展示エリアは約5000㎡を占めています。

日本の里山をモチーフとした園内は、一・二年草や花木、宿根草、球根といった園芸分類や用途などによって、「草花の園」「木花の園」「千草の園」など、18のエリアに分かれ、古代の日本と海外の植物の交流に始まり、夢に熱き情熱をかけた育種家たちが生み出し

た園芸品種の紹介、人と植物の関わり、そして、これからの園芸への提案といった一連のストーリーを描いています。

また、その中の、5つのエリアに関しては、季節に合わせて概ね月毎にテーマフラワーを設け、一つの品目についてできるだけ多品種を集めることとし、入れ替えながら展示しました。

「百華園」だけで、約5000品種50万株の植栽を目標に取り組んでいきましたが、実際には、その品種数は約7,000品種にも及ぶことになりました。これは、国内の園芸博覧会史上初めての試みであり、植物園などにおいても、決して見ることでできないものです。恐らく、今後も当面はあり得ないことかもしれません。

また、花のあふれる修景と珍しい植物や希少植物などの組み合わせによって、初心者から専門家に至るまで、幅広い来場者が楽しみながら、園芸への理解を深め、知識の向上が可能になるような展示を目指しています。多くの来場者からお褒めの言葉をいただきましたが、プロデューサーの直轄事業ともいえるこの企画の実現には、数々の苦労がありました。

展示の企画

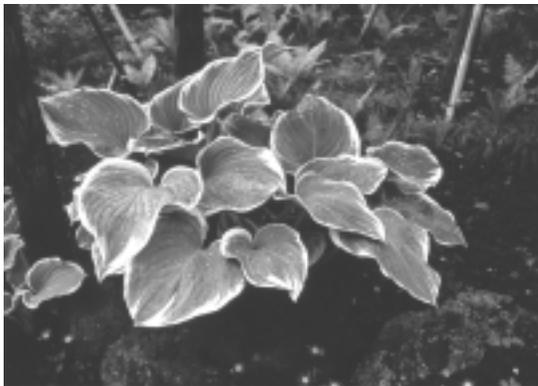
「百華園」は18のエリアが一連のストーリーになっており、これらは大きく分けて「生活と庭園」「華やかな園芸植物」など大きく5つのテーマに区分けされています。各エリア毎の展示内容は、テーマを意識しながら詳細に組み立てられ、例えば針葉樹を中心に収集した「常磐の庭」では、「園芸文化の原風景」というテーマのもとに、日本起源の針葉樹に焦点を当てました。

日本の針葉樹の代表的な種とそれらから誕生した変異個体による品種を収集展示し、初心者でも楽しめるような配慮をしています。

例えば、「ラセンスギ」のように形態的に分かりや



一般初公開となったロサ・キネンシス・スポンタネア
(今回の株は再発見をした荻巣氏が自ら再発見した場所で1985年に採種された株)



発見された山形県寒江市の愛好家から分けてもらった本家
本元のサガエギボウシ

表1 百華園の5つのテーマと18のエリア

テーマ	エリア名称	対象植物
プロローグ 園芸文化の原風景	水脈(みお)の路	渡来植物
	擬宝珠(ぎぼうし)の径	ギボウシ
	羊歯(しだ)の径	シダ
	常盤(とぎわ)の庭	針葉樹
華やかな園芸植物	草花(くさはな)の園	一・二年草
	木花(このはな)の園	花木
	花帯(はなおび)の庭	多肉植物
	南風(はえ)の庭	熱帯・亜熱帯植物
	色葉(いろは)の庭	カラーリーフプランツ
生活と庭園	竹笹(たけざさ)の庭	タケ・ササ
	枝(えだ)の庭	切枝
	厨(くりや)の庭	野菜
	果(くだもの)の庭	果物
華やかな園芸植物	蔓(かずら)の園	ツル植物
	千草(ちくさ)の園	宿根草
	珠(たま)の園	球根
	水面(みなも)の庭	水生植物
エピローグ 21世紀の園芸	行方(ゆくえ)の路	将来の園芸植物

すいもののでできるだけ選択し、また、基本個体と変異個体を隣同士に配置し、比較を容易にするなど、「百華園」の展示をご覧になった人たちが植物への興味を増していただけるような工夫をしました。

テーマフラワーを入れ替えながら展示するエリアでも、荻巣樹徳氏が再発見し世界で話題となった「ロサ・キネンシス・スポンタネア」のような幻の植物や、千葉大学園芸学部植物細胞工学研究室で開発された「チョコモス」のような最新品種などを取り上げつつ、それぞれの園芸植物ごとに品種改良の歴史を紹介するなど、様々な話題を提供しています。

18のエリアは表1のように配置されました。

種苗の調達と養生

「花の万博」以来のガーデニングブームにより数多くの園芸植物を目にする機会が増えました。しかしながら、その大半は海外から新たに導入された植物であり、品種改良の段階で重要な貢献をしてきた古い系統の園芸品種などは、いつの間にか振り返られることもなく、世の中から姿を消してしまっているものが多数あることに気付かされます。

それは予想以上の速度で進んでおり、特に品種改良のスピードが早い園芸植物ほどそのような傾向にあります。「野生種は保護することにより守ることができですが、人が作り出した園芸品種は、人が積極的に係わって保存することが大切です」と、「百華園」を視察された秋篠宮殿下がお言葉を述べられました。まさに園芸品種の保存は、これからの日本の園芸界に求められる大きな課題です。

このような課題を肌で感じながら、国内外の種苗会社や公的機関、愛好家などの協力により、「百華園」の基本理念に沿った植物調達を行うことができました。

植物の調達に続く問題はその養生です。「百華園」は少量多品種の準備が不可欠であり、通常に出荷される植物はもとより、これまでの園芸博覧会や全国都市緑化フェアなどにおける特注による植物とは全く異なる生産方法を採用しなければなりません。また、種によってはその生産にあたって専門知識を必要とする場合も多々あります。

今回は静岡県が主催する園芸博覧会であり、植物の生産に関しても基本的には県内で行う方針でのぞみましたが、実際には、多様な問題が生じました。

生産者によって技術の差が非常に大きく、少量多品



日本古来の模様を描いた多肉植物のカーペットベディング

種の生産方法ではその力量の差は歴然となります。1品目で400品種以上に及ぶ植物を難くこなす人がいる反面、納入された苗を数ヶ月間も放置したまま、見かねて私どもが植え替えに出向くようなケースまで実に様々です。この生産上の技術力の差は開幕後までも様々な問題を引き起こすこととなりましたが、最終的には生産者の皆さんの結束もあり、計画の8割程度の植物が無事納品に至りました。

スケジュールの調整と植栽

少量多品種を取り扱うことに関する課題は、種苗の調達から、生産、植栽、維持管理、さらには、来場者への情報提供に至るまで、幅広く存在します。

今回の展示の中で最大の数となったパンジー・ピオラはなんと815品種にもものぼりました。これらを間違いなく来場者にお見せするためには、播種から鉢上げ、納品、植栽、展示と情報提供など全ての工程において、品種を明確にしておく必要があります。

通常の修景花壇のようにアレンジとして見せる植物は、個々の品種の生育スケジュールのずれを花壇の設計内容を現場で変更することによって対処が可能です。それでさえ相当な労力を要しますが、「百華園」では、計画に沿って1品目の多品種を同時に展示するわけですから、開花調整は一苦労です。

生産段階においても可能な限り開花調整を行います。品種や生産者の力量により差が生じます。多くの来場者は、花を觀賞するために来場するのですから、よりよい状態をお見せするのは当然のことです。この点は、花のイベントが公園や植物園などと異なる重要なポイントです。その目的を達成するため、事前に、生産状況の確認を行いつつ、展示中の植物の開花状況

と照らし合わせながら、具体的な入れ替え日を検討します。

工業製品とは違い、植物は生き物ですから、納品予定日に規格に沿った完成品とするには、高度な技術を要します。さらに、例年になく異常なまでの今年の猛暑が、生産スケジュールに多大な影響を及ぼしました。全体的に開花時期が早まり、予定より早い納品を生産者から望まれることが多くありました。宿根草は、第2期に植栽したペラルゴニウムの満開時に、第3期に予定したハナショウブが生産地で開花期を迎えるなどの問題が生じ、特に、ダリアは猛暑により状態が悪く、初夏の展示をあきらめ、切り戻しによって、秋の展示とするなど、苦労話はずきません。

限られた展示エリアの中に、可能な限り当初の展示のテーマやスケジュールに沿って、具体的な品種の割付を行います。

このように、一見、各品種を区画に当てはめるだけのように見えますが、開花の状況によって、植栽の直前まで図面の変更をするなど、通常の花壇では考えられないような調達から生産、植栽、維持管理に至るまでの技術やノウハウの蓄積には、相当なものがあります。

維持管理と運営

今年の異常気象は、維持管理にも相当な配慮を必要としました。猛暑のため、灌水の頻度も高くなり、コンテナやハンギングバスケットなどには、1日3回以上の灌水が必要です。

また、台風の多さも、今年の特徴です。毎月のように、台風がやってきては、様々な対策を要求します。浜名湖はご存知の通り、汽水湖であり、潮害の心配もあります。

異常気象のせいでしょうか。害虫の大発生もありました。6月から7月にかけては、ドウガネブイブイの発生、つぎはヨトウムシです。単に觀賞する植物をアレンジする技術では到底対応できないのが「百華園」、学んだ園芸の知識を総動員する貴重な経験です。

「百華園」を始めとする「浜名湖花博」の特徴の一つとして、植物名称の統一が挙げられます。特に、「百華園」ではこだわった部分です。

現在の日本では、一つの植物を示すのに、様々な異なる名称が存在します。また、わが国では、一般の愛好者への学名の浸透が遅れています。

国際園芸博覧会として、世界共通の学名を普及させ

る絶好の機会ととらえ、個々の植物に学名及びその日本語表記のプレートを掲出しました。これらの表記は、国内における統一を図るという観点から、原則として、アボック社の『日本花名鑑』に準拠しました。

来場者からは「長いアルファベットやカタカナばかりでわかりにくい」「和名を知りたい」といった声が多数ありました。アルファベットを母国語としない日本において、学名は難しいものというイメージが強く、浸透するには時間がかかることを痛感しましたが、もはや愛好者がそのことを避けられない時期に来ているのです。

また、読み方についても、例えば、*Petunia* をラテン語の読み方に従って、ペツニアと表記すると、ペチュニアとは別の植物と思う人、間違っているという人が多数存在します。日本名を統一し学名と併記する、販売時にも品種名だけでなく学名を必ず表記していけば、植物名称の混乱も減少するのではないのでしょうか。植物を業とする人は、我々も含めて消費者とともに共通の言葉をもつべき時代が訪れていることを認識する必要があります。

来場者の反応

「浜名湖花博」は、大変な好評を博し、目標の500万人を達成しました。会期中盤には、猛暑の影響により、来場者数が伸び悩んだ時期もありました。しかし、花の力は偉大です。花や緑に比重を置いた展示が効を奏し、中高年や女性層の興味を引き、秋の訪れとともに来場者の促進につながったといわれています。

また、リピーターの多さも目標達成の要因の一つです。常に植え替えを繰り返し、いつ来ても新しい植物や風景に出会える会場作りを目指し、中には100回を超える来場を達成した方も少なくありません。

各品種を1枚ずつ、品種名をメモしながら、写真に収めている来場者も多く、また、ケイトウのように、これまで好みではない植物が、「百華園」の展示を見て、花形の多様さ、色の美しさに感動し、大好きになったという来場者もいました。

新たな植物やその多様性に興味を持つ人が増え、大阪の「花の万博」で芽生えたガーデニングブームがより高度な一つの文化として定着していくことを願っています。
(写真提供：㈱グリーンダイナミクス)



ケイトウが咲き乱れる「百華園」草花の園

伝統園芸植物の競演 江戸の粋を集める

株式会社 樹芸 山口 安久

浜名湖花博は「花の街」「水の園」「緑の里」の3つのエリアに分けられている。私が委嘱されたのは「緑の里」の園芸文化館である。日本の伝統園芸は世界に誇る日本の文化であり、植物に込められた伝統の価値観を後世に伝えることを開館の主旨とした。

第一室は「園芸文化・発展の系譜」と題し、江戸時代の人々の技と感性で極めて高い水準に発達した伝統園芸文化の発展とその系譜を分かりやすく紹介。

第二室は「伝統園芸植物の競演」で、文字どおり江戸園芸の叢智と精神を受け継いで、今日も生き続けるさまざまな伝統園芸植物の多様な姿を展示した。

第三室は「盆栽・装飾の技」と題され、自然の情景や時間をも凝縮して究極の技が込められ、芸術の域に達した盆栽の世界を展開。

第四室は「新たな園芸文化をめざして」と題して、生きた文化資産である伝統園芸植物をいかに保存し、いかに未来へ継承してゆくか、その意義を提言した。

以上4つの展示室と映像シアターに区分され、日本の園芸文化の全体像を概観できるように構成した。

私の担当部署は主に第二室。約40種類・800品種の伝統園芸植物を14期に分け、入れ替え展示するものである。その展示プログラムは表1のとおりであるが、5カ所の脇床を付する床の間、坪庭、屋外展示場と、それぞれ和のステージに、植物を鉢に植えてコーディネートした。

特筆すべきは、江戸時代の園芸文化を往時のままに再現する試み、輸入種を含めた現代の園芸植物を江戸時代から伝わる伊万里や瀬戸・尾張の染付けの器に調和させる試みをしたことである。

往時の園芸文化を伝える古書や古図譜を見ると、ほとんどの器が染付けの磁器類である。秀吉の時代に磁器生産が始まっている。戦乱が治まり江戸時代になると、将軍家をはじめ諸大名の間でも園芸熱が盛んになる。そして参勤交代の折に藩窯で焼成された名工による逸品鉢や水盤が江戸にも伝わるようになる。したが

って当時の図譜に見られる園芸用の器のほとんどが、当時最も高い評価を受けていた染付けの器なのである。現代の園芸界では、名品の多くは、好事家の鑑賞鉢となっていて、盆栽を含めて、これらの染付けの器に植えられることは少なくなっている。

しかし、実際に古い染付けや瑠璃釉の貼花文鉢に植えてみると、植物に気品が備わり、豊かな表情を現してくれる。江戸時代の美意識を垣間見ることができる。往時の陶工の技の凄さ、大名たちの粋な意匠にはただ驚くばかりである。

江戸の園芸文化を語るとき、同時進行した“ヤキモノ”の植物の器のことが表れないのは、明らかに片手落ちである。江戸の名工たちが命を掛けて創った鉢や水盤を、今粗末な扱いをしていることをシーボルトやフォーチュンが知ったら、きっと嘆くであろう。

ともあれ、古鉢と植物の調和は、多くの園芸愛好家に絶賛を博したことは事実である。園芸文化館を訪れた240万人の人達が、江戸の美意識に賛同を得たことも事実である。器に大いに研究課題を残したといえる。

記録的な猛暑を挟んでの187日間の開催の結果、花博会場には540万人が入場し、園芸文化館には240万人が訪れた。国際園芸博覧会の面目も果たし、大旨成功したと思っている。

だが、伝統園芸には、多くの課題を残しているように思う。大方の生産者・販売者に保存継承の意識がないことである。「その植物なら、あのナーセリーへ行け」といえる生産者が極めて少ないことである。量産するばかりで、その植物を美しく見せる努力をしていないことである。多くの理由はあるだろうが、このままでは失っていくばかりである。

先人の築いた世界に誇れる伝統文化を何とか守り育てて行きたいものである。

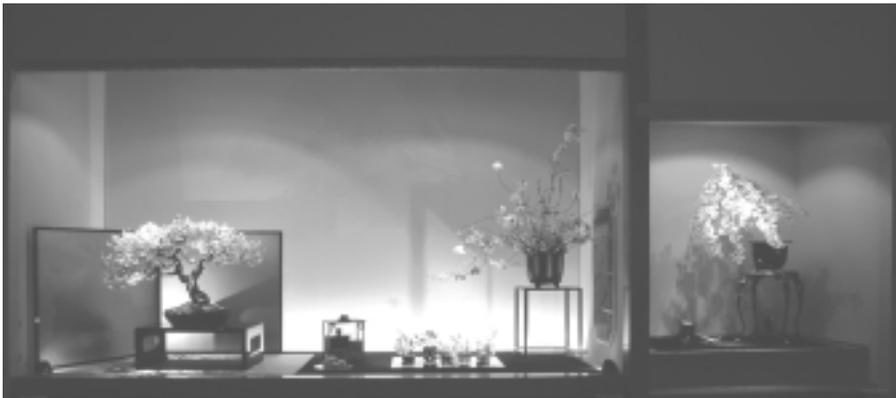
千葉大学園芸学部出身の多くの皆様にご指導とご支援を賜りました。ありがとうございました。

表1 園芸文化館第二室展示プログラム

<p>1期 4月8日～19日 雪割草（ゆきわりそう） 木瓜（ぼけ） 万年青（おもと） 桜（さくら） 椿（つばき） 桜草（さくらそう） 花桃（はなもも）</p>	<p>6期 6月19日～30日 擬宝珠（ぎぼうし） 斑入り植物 紫陽花（あじさい） 葉蘭（はらん） 変化葉瓦葺（へんかばのきしのぶ） 雪割草葉芸（ゆきわりそうはげい）</p>	<p>11期 9月1日～13日 松〔五葉松〕（ごようまつ） 松葉蘭（まつばらん） 南天（なんてん） 富貴蘭（ふうきらん） 長生蘭（ちょうせいらん） 巻柏（いわひば）</p>
<p>2期 4月20日～5月6日 楓（かえで） 細辛（さいしん） 藤（ふじ） 躑躅（つつじ）</p>	<p>7期 7月1日～15日 富貴蘭（ふうきらん） 石菖（せきしょう） 杉（すぎ） 葉蘭（はらん） 変化葉瓦葺（へんかばのきしのぶ）</p>	<p>12期 9月14日～20日 松〔五葉松〕 杜鵑草（ほととぎす） 南天（なんてん） 富貴蘭（ふうきらん） 長生蘭（ちょうせいらん） 巻柏（いわひば）</p>
<p>3期 5月7日～18日 楓（かえで） 東洋蘭〔報歳・金稜辺・駿河〕 牡丹（ぼたん） 芍薬（しゃくやく）</p>	<p>8期 7月16日～31日 花蓮（はなばす） 石菖（せきしょう） 杉（すぎ） 紫陽花〔玉紫陽花〕 石菖（つわぶき）</p>	<p>13期 9月21日～30日 松〔赤松〕（あかまつ） 杜鵑草（ほととぎす） 南天（なんてん） 万両（まんりょう） 百両（からたちばな） 紫金牛（やぶこうじ）</p>
<p>4期 5月19日～6月2日 杜若（かきつばた） 長生蘭（ちょうせいらん） 伊勢撫子（いせなでしこ） 臈月（さつき） 富貴蘭（ふうきらん）</p>	<p>9期 8月1日～12日 巻柏（いわひば） 斑入り植物 松〔黒松〕（くろまつ） 大輪朝顔（たいりんあさがお） 名古屋朝顔（なごやあさがお） 肥後朝顔（ひごあさがお）</p>	<p>14期 10月1日～11日 万年青（おもと） 山茶花（さざんか） 菊（きく） 万両（まんりょう） 百両（からたちばな） 紫金牛（やぶこうじ）</p>
<p>5期 6月3日～18日 擬宝珠（ぎぼうし） 斑入り植物 紫陽花（あじさい） 江戸花菖蒲（えどはなしょうぶ） 肥後花菖蒲（ひごはなしょうぶ） 伊勢花菖蒲（いせはなしょうぶ）</p>	<p>10期 8月13日～31日 巻柏（いわひば） 斑入り植物 松〔黒松〕（くろまつ） 変化朝顔（へんかあさがお）</p>	

写真提供：&静岡国際園芸博覧会協会・NHKアート・榊樹芸

第二室展示植物



1期 桜 床・脇床



2期 躑躅 屋外展示



2期 藤 坪庭全景（右：徳川家由来の斑入り藤）



3期 芍薬 全景



5期 紫陽花 全景



7期 石菖 脇床



10期 変化朝顔 全景



13期 菊（百種接分け菊）花舞台



13期 百両 脇床

「草木奇品家雅見」「草木錦葉集」の斑入り植物を展示

横井政人

伝統園芸植物の一つとして、江戸時代から愛培されている斑入り植物約70種を展示した。期間は6月の5～6期と8月の9～10期であった。

斑入り植物は江戸伝統文化を受け継ぎ、新たな園芸文化を保存、将来に継承する代表的な植物であろう。ここでは177年前の江戸時代、文政10年（1827）発行の「草木奇品家雅見」や、文政12年（1829）発行の「草木錦葉集」に図解、記載されていて、疑いなく現在でも見られる草木の種類を選んだ。材料は筆者栽培の種類を、山口安久氏のすばらしい高級鉢に植え替え、同氏らの栽培技術で約半年間にわたり肥培。展示期間中、見違えるほどすばらしくなって展示できた。

若干、展示植物の解説をしたい。図1のコウヤマキ斑入りは現在でも珍重されるが、当時の解説に「なるせこうやまき」は佐橋成世候栽培の品。殊に愛樹なればここに顕す」とある。現在みられる品種と同じと思う。もう一図（図2）のウチワサボテン「高橋さぼてん」は、現代品の「初日の出」と同じと認められる。展示会場ではすばらしく生長し、驚きの的になった。メキシコ原産の植物であるが、当時既に輸入されていたことは明らかである。また熱帯原産のハイビスカス（ブッソウゲ）斑入りも当時あり、「斑入すさう花、近來花の変り所々より数種出る。駒込うつみやしき長左工衛門出はひとえにて斑まわりよく見事なり」とあった。会場では真っ赤な花が連日咲き、驚かされた。

現在珍しい斑入り種にはマテバシイ、ホオズキ、オカメザサ、ツルドクダミなどがある。

今回の出品展示にあたって、株式会社樹芸 山口安久氏、また同社の皆様に絶大なるご支援、さらに展示期間中の株式会社グリーンダイナミックス 松井美子さんの長期間のご助力なしでは絶対に成功できなかった。ここに心からの感謝のことばを述べたい。また安行の佐藤植物園ならびに樹の里からは良品の出品を賜り感謝したい。



図1 コウヤマキ



図2 ウチワサボテン

斑入り植物の展示

園芸文化館見聞録

上 田 善 弘

園芸文化館は日本の園芸文化を一般の人にも理解できるように、パネルによる解説と実際の植物により展示されていた。各室の内容について、その感想とともに述べていきたい。

第一室「園芸文化・発展の系譜」

江戸に花開いた園芸文化が、古代の日本人と花との関わりから始め、どのように発展してきたかを展示。

まず、縄文人の墓から多量の花粉が発見されたことから、太古の日本人が既に花に興味をもち、利用していたことが分かる。その後、花を歌に詠む中国の文化が日本に伝わってきたことを紹介。花を美の対象として観賞し、歌に詠む「文化」である。この文化は、日本では751年の「懐風藻」に始まり、万葉集、古今和歌集へとつながっていく。そしてさらに、花木の流行、大名庭園を管理する種樹家（植木屋）の出現、三代将軍が無類の花好きだったことから始まる、世界に類をみない江戸の園芸ブームへと発展する。伝統園芸植物の育成、園芸書の出版など、それぞれのでき事を年表形式で示されている展示は分かりやすく、日本の園芸文化の全貌を理解できる恰好の資料である。

この後、浜名湖花博の開催地、静岡と園芸との関わりについて、駿府原宿（現、沼津市）で営まれた園芸業者、植松家とその庭園、「常笑園」が紹介されていた。最後にこれらの江戸の園芸文化の特徴を、1）斑入り葉、変わり葉など、他の園芸文化にみられない奇樹異草を愛でたこと、2）鉢、飾る卓、棚などの道具類を発達させ、鑑賞の作法を確立、独特の「鉢」文化を生み出したこと、3）身分階級を越えた花文化の庶民化、として挙げていた。

第二室「伝統園芸植物の競演」

伝統園芸植物を伝統的な様式で展示していた。伝統的な様式とは、床の間に対座して観賞できるように飾ることをいう。また、植え込む鉢はその当時用いられたもの。植物の文化に関わる事柄を歴史とからめて説明されており、より理解を深めるのに効果的な演出がされていた。植物、鉢さらに飾る場所の3点をそろえ、江戸時代を彷彿とさせるものであり、その文化的価値を知らせるに充分な展示であった。



第三室
「盆栽・装飾の技」
中庭 全景

第三室「盆栽・装飾の技」

盆栽の定義、盆栽の樹種、樹形など、盆栽とはどういうものなのか、一般の人への入門解説から始まる。ここでの見所は、中庭の屋外展示の宮内庁の盆栽である。これまで外で展示されたことのないもので、圧巻は樹高2.8mもある巨大なヒノキの盆栽である。ここでも、盆栽の装飾に重要な鉢が展示されている。

第四室「新たな園芸文化をめざして」

海外の園芸文化との交流から、日本の園芸文化のもつ意義、世界的な位置について分かりやすく展示されていた。欧州に渡った日本の園芸植物や野生植物、逆に欧州から日本に導入された植物が紹介されていた。これらの生きた文化資産である伝統園芸植物を如何に保存し、継承してゆかがここでは提言されていた。

以上の展示を見るにつけ、長い年月をかけ育まれてきた独自の日本の園芸文化を如何に継承していくか、考えさせられる意義深い展示であった。



第三室「盆栽・装飾の技」中庭 檜（宮内庁所蔵）

浜名湖花博における植物展示

浜名湖花博屋内展示担当部長

山田 達 男



ほほえみの庭

「花・緑・水～新たな暮らしの創造～」を開催テーマに静岡県浜名湖畔で開催していた「浜名湖花博」は、187日間の会期中に540万人余の観客が来場し、10月11日、その幕を下ろした。開催地周辺はわが国有数の園芸産地であるが、奇をてらうことなく園芸博覧会の原点である植物の魅力の情報発信に徹するとともに、開催地にふさわしい良質の花と緑を会場全体にふんだんに展開したことが、幅広い来場者の賛同を得たものと考えられる。「浜名湖花博」における植物展示の計画づくりに携わった立場から、植物展示の一端を紹介する。

「浜名湖花博」における植物展示の最大の特徴は、今までの園芸博覧会にない花緑の量と種類の豊富さである。会期中に使用した花は、6,000品種、500万株。樹木は恒久、仮植を合わせて8万本に上る。主要な植替え作業だけでも5回、平均すれば毎日2万株以上の花を植替え続けたことになる。特に一大植物コレクションガーデン「百華園」や、60万株の花と音楽が融合した「ほほえみの庭」は、連日多くの観客で賑わった。

1990年に開催された大阪花博が、現在のガーデニングブームの引き金になったとされている。大阪花博を境にして、多くの一般家庭で花が植えられ、ホームセンターには多様な植物や園芸資材が置かれるようになった。しかしながら現在のところ、植物の基本的な性質や植栽の条件、栽培技術などを十分に理解してガーデニングを行っている人はごくわずかであり、さらには品種情報については一部の植物以外には、ほとんど知られていないのが現状である。

ガーデニングの本場イギリスでは、使用される植物の種類の高さもさることながら、多くの人々がナーセリーから直接種苗を購入するなど、品種レベルで植物が扱われている。日本においても、多様化する消費者のニーズに応えるため、より詳細な品種情報を提供することがガーデニングの質を高め、今後の園芸文化の発展につながる。このような考えのもと、「百華園」では植物や品種に焦点を当て、一般の園芸店などでは

通常は見られない多くの品種や原種を展示した。パンジー・ビオラだけで800、ペチュニアは400品種を紹介したが、多くの観客が植物の奥の深さを認識し、これからのガーデニングに役立つヒントを得てくれたことであろう。第二の特徴は、植物の魅力を引き出すための周到な修景や花壇設計にある。植物単体で観るよりもその魅力が一層際立つよう数々の工夫を施している。

目標とした来場者500万人を達成した時、識者が「花の威力の大きさを感じた」とコメントしていたが、全く同感である。そしてさらに、人の手で花がもつ魅力を引き出し、最良の状態で展示することによって花は一層輝きを増し、多くの観客を魅了する。これも花博を開催する側に身を置いてみて改めて実感した。

花博に来場された観客は、「百華園」や「ほほえみの庭」だけでなく、トイレや休憩所、売店の壁面など、会場のいたるところに展示された花や、カラーリーフの効果的な組み合わせ、さまざまな立体花壇など、花緑の魅力を最大限引き出す努力がされていたのをご覧になったことと思う。その他、コンテナを使用した組み合わせ式の生垣や、フォークリフト用のパレットを用いた移動式の花壇など、新しい展示技術の試みや、膨大な量の植物を計画どおりに調達するための生産体制など、他にも紹介すべきことがたくさんあるが紙面の都合で割愛する。

園芸・造園関係の識者の指導を受けながら展示計画の策定を進めたが、南半球も含めて日本と同緯度地域を原産とする未だ園芸的な利用が進んでいない植物の紹介や、世界中の葉数の異なる松類のコレクションなど、具体化しなかった計画も多くある。すべてが計画通りに実現できた訳ではないが、花博で取り組んだ植物展示がこれからのガーデニングの参考となり、人々の暮らしがより豊かになることを願っている。

なお末筆で恐縮であるが、「浜名湖花博」の開催にあたっては、多くの「花葉会」の会員の皆様にご支援をいただいた。ここに心から感謝を申し上げます。

女王陛下率いる英国王立園芸協会 創立200年記念を迎えて

英国王立園芸協会日本支部

鈴木邦彦

今回、英国王立園芸協会200年記念にあたり、当協会紹介の原稿依頼をいただきましたが、実は私はちょうど2年前にこの協会の事務局にお世話になる機会を得たばかりです。

私は、昭和44年に卒業し、当時発展拡大途上の百貨店に入社。市民産業の一翼を担う為の川上から川下への事業化ということで、新設園芸部を立ち上げました。当時業界では珍しい直営店舗の運営や、舞鶴につばき園直営農場を所有していたことから、1990年大阪の花と緑の博覧会に合わせて、国際つばき大会を舞鶴に誘致し、事務局運営をしたことなどを思い出します。また、出身学部が園芸ということで、園芸業界に関係した英国王立園芸協会の事務局として、業界の仕事ができることは大変喜ばしいことと思っております。

さて、本題に入りますが、英国王立園芸協会（RHS）は、1804年にロンドンのピカデリーにあった小さな本屋「ハッチャード」で、陶磁器で知られるウエッジウッド設立者の長男ジョン・ウエッジウッドら7人が発起人となって、スタートしました。

2004年、設立200年を迎えるにあたり、2月26日、ロンドンフラワーショウのプレビューに合わせて、本部ローレンス・ホールでエジンバラ公（エリザベス女王の夫君）を始め、ロンドン市長、園芸関係の著名人を集め、総勢500人で、今年行われる一連の記念イベントの開始宣言が行われました。日本においても、去る2月26日、英国大使館において、RHS J共催で記念式典を行い、マスコミ、業界関係者を招待して、英国王立園芸協会の存在をアピールしました。英国王立園芸協会の歩みについては、後段に年譜にして紹介いたします。

英国王立園芸協会の活動

世界中の園芸愛好家対象とした園芸普及・啓蒙活動として、6つの柱をもって運営しております。

フラワーショウの開催

世界の3大フラワーショウと呼ばれている、チェルシーフラワーショウ、ハンプトンコートフラワーショウ、タットンパークフラワーショウの開催。

RHS 付属ガーデンの運営

ウイズリーガーデン（サウスイースト）、ローズモアガーデン（サウスウエスト）、ハイドホールガーデン（イーストアングリア）、ハロウカーガーデン（ノースイースト）と4つの英国の地域環境に応じたガーデンがあり、特にウイズリーガーデンは、RHS本部の中心的存在として運営をしている。

図書館の運営

リンドリー図書館は、世界でもっとも重要な図書館で、園芸および造園、庭園史、フラワーアレンジメントなどの様々な分野にわたる5万冊以上の書籍、そして2万2千点以上のボタニカルアート・コレクションと世界最大規模の園芸トレーディングカタログ・コレクションが所蔵されている。

出版

英国および世界の最新園芸情報を満載した会報誌「The Garden」の発行を始め、様々な園芸専門書籍、小冊子、ビデオなどを出版、制作している。

園芸品種名の登録

現在、9部門の国際名称登録機関としての機能を果たしている。これは、世界各地で次々に生み出される植物の新品種に対して、名前の重複を防ぎ、国際的な混乱をきたさないように、属別の登録機関が世界各地に設置されているが、その一端を担っており、RHSが登録機関として指定されている属は、スイセン属、デルフィニウム属、ツツジ属、ユリ属、ラン類、ダリア属、ナデシコ属、コニファー類、クレマチス属の9部門である。

研修生制度

国際的に若い園芸家を育成するための研修制度をもっており、世界各国から受け入れている。サファイテフ

イケート、アドバンス・サフィティケート、ディプロマ、マスター資格認定があり、資格は英国全土の200を超えるカレッジで提供される。日本支部においても毎年、RHS研修生選考試験を行っており、本部への推薦作業を行っている。研修制度の案内は、ブリティッシュカウンシルを始めとして、園芸学部、農学部のある大学、短大、園芸専門コースのある専門学校などのHPで募集を告知。選考審査には、当協会理事である、園芸学部横井名誉教授にもお手伝いをいただいている。

RHS 200年のあゆみ

RHSの歴史は、英国の園芸の歴史そのものといっても過言ではないでしょう。

誕生1804～1820

- 1804年 ロンドン園芸協会設立。創立者はジョン・ウェッジウッド（ウェッジウッド設立者の長男）、ジョーゼフ・バンクス卿、ジェイムズ・ディクソン、ウィリアム・フォーサイス、ウィリアム・タウンゼンド・エイトン、R.A. ソールズベリー、チャールズ・グレビルら。
- 1809年 協会は国王による初の特許状を授与される。
- 1818年 協会は、送付された植物を一時的に保管するため、ケンジントンに初の庭園を得る。庭園はその後1822年に閉鎖される。
- 1821年 協会は、チジックにあるデボンシャー侯の私有地33エーカー（約13万3500㎡）を賃借し、そこに実験栽培用の庭園を作る。

成功と失敗 1821～1858

- 1820～1846年 協会はプラントハンターを海外に派遣。ジョン・ボッツ、ジョン・ダンパー・パークス、ロバート・フォーチュンらを中国へ、ジョージ・ドンとジョン・フォーブスをアフリカへ、デイビッド・ダグラス、テオドル・ハートウェグを北米に、そしてジェイムズ・マクレーを南米に派遣。
- 1827～1829年 初の祝宴を開催。ロンドンシーズンと呼ばれる社交行事の一部として定着する。1829年は雨により中止となった。
- 1833年 競合する一流の協会と共に、チジックにて

展覧会開催をスタートさせる。

- 1836年 ガーデナー試験導入。
- 1841～1846年 化学委員会、植物の栄養と肥料に関する調査を始める。
- 1857～1859年 財政危機。協会は植物標本集および庭園の植物などを多数売却。さらに図書館を売却。
- 1858年 果樹委員会（後の果樹・野菜委員会）、花卉委員会設立。優秀な植物に与えられるファースト/セカンド・クラス・サーティフィケート（後のメリット賞/AM）制定。

ケンジントン時代 1859～1888

- 1861年 新しい特許状により王立園芸協会と名称を改める。グレート・エキシビジョンのために1851年に王立委員会から賃借して作った新しい庭園をケンジントンにオープン。グレート・エキシビジョンのオープニングの一部として、英国初のフラワーアレンジメントコンテストが開催される。
 - 1862年 協会のケンジントンガーデンにおいて第2回グレート・エキシビジョンが開催される。初のグレート・スプリング・ショウ。
 - 1865年 ガーデナー開発委員会：初の全国ガーデニング検定試験を開始。
 - 1866年 国際園芸展と植物集会開催。収益により1859年故王立園芸協会会長ジョン・リンダリーに売却された図書館を買い戻す。
 - 1866年 王立園芸協会会報誌開始（その後1976年に名称は『The Garden』と改められる）
 - 1867～73年 協会はベリー・セント・エドモンド、レスター、マンチェスター、オックスフォード、ノッティンガム、パーミンガム、パースなどで地域ごとに行われる一連のショウを毎年主催。
 - 1868年 RHSは種子売買の実態を調査するため委員会を設ける。その結果、粗悪種子法（1869年）が制定される。
 - 1883～1885年 初の集会：全国リング集会、全国ナシ集会主催。
 - 1888年 協会はケンジントンの敷地を立ち退く。
- 再興 1888～1914**
- 1888年 グレート・スプリング・ショウはテンブルガ

ーデンに移り、ウエストミンスター・ドリル・ホールにおいてショウが開催される。

- 1893年 R H S 一般試験の開始。
- 1895年 チェックにおいてテベジタリアン晩餐会。
- 1897年 ビクトリア栄誉賞制定。
- 1899～1906年 第1回、第3回交雑育種国際会議を開催。
- 1903年〔R H S ガーデン・ウィズリー誕生〕
トマス・ハンベリー卿がウィズリーの庭園を新しい実験栽培園として協会に寄贈。
- 1904年 協会創立100周年を記念してヴィンセント・スクエアにニュー・ホール（現リンドリー・ホール）が建設される。
- 1908年 「スイセン属分類名リスト」が初めて刊行される。協会初の目録。
- 1911年 全国園芸ディプロマ導入のための準備が始まる。第1回試験は1915年に開始。
- 1913年〔チェルシー・フラワーショウの始まり〕
グレート・スプリング・ショウがチェルシーの敷地に移る。
- 1914～1918年 第一次世界大戦。

2つの大戦の狭間で 1919～1939

- 1922年 全国果樹試験栽培がウィズリーで開始（1960年にはプログデールに移る）。最初のトラスト（1870年に設立）からヴィーチ記念メダル授与を引き継ぐ。
- 1928年 グレイコート・ブレイスにニュー・ホール（現ローレンス・ホール）がオープン。
- 1928年 R H S ガーデン・プランニング集会開催。ランドスケープアーキテクト協会の前身。
- 1929～1931年 「インデックス・ロンディネンシス」の刊行。協会が1909年に編纂を始めた、植物画の標準的な著書目録。
- 1929年 名誉会員制度の設立。
- 1935年 R H S は、初の生物農薬 *Encarcia formosa*（オンシツコナジラミ駆除剤）の供給者となる。
- 1939年 園芸カラーチャートの初版発行。
- 1939～1945年 第二次世界大戦。

戦後の発展 1945～1984

- 1945年 R H S はロードデンドロン協会を引き継ぐ。
- 1950～1952年 R H S は、1950年園芸大会議におい

て栽培植物の学名コードを提案。1952年に開催された第13回国際園芸大会議（R H S 主催）において第1版が承認、刊行される。

- 1951年 『RHS Dictionary of Gardening（R H S ガーディング事典）』刊行。
- 1955年 国際植物登録機関の発足。R H S は現在9部門の登録機関としての職務を果たす。9部門それぞれの植物の登録機関として指定された順に列挙すると、スイセン属、デルフィニウム属、ツツジ属、ユリ属、ラン類、ダリア属、ナデシコ属、コニファー類、クレマチス属となる。
- 1979年 英国庭園・植物保存評議会（NCCPG）が発足。

活動の広がり 1984～現在

- 1984年 ロビン・ハーバートが会長に就任し、リドリー・レビュー委員会を発足。協会の活動と経営を報告させる。
- 1987年〔R H S ガーデン・ローズムーア誕生〕
レディー・アン・パーマーが、ローズムーアに所有する庭園を協会に寄贈。
- 1987年〔初の支部が日本に誕生〕
（株）西洋環境開発とR H S がスポンサー契約を締結し、R H S J 発足。
- 1992年 『New RHS Dictionary of Gardening』刊行。
- 1993年〔R H S ガーデン・ハイドホール誕生〕
ディック&ヘレン・ロビンソンがハイドホールに所有する庭園を協会に寄贈。
- 1993年〔ハンプトン・コート・パレス・フラワーショウ誕生〕
- 1999年〔タットン・パーク・フラワーショウ誕生〕
- 2001年〔R H S ガーデン・ハーロウ・カー誕生〕
R H S は北部園芸協会と合併。北部園芸協会所有のハーロウ・カーはR H S の4番目の庭園となる。
- 2002年 R H S の管理の下、初の「プリテン・イン・ブルーム」（街や公共施設の緑化活動）のコンテストが開催される。

英国王立園芸協会日本支部

17年前に、日本の園芸愛好家が伝統あるR H S に気軽に参加できるように、また、日英の園芸文化の掛け

橋となるために設立。現在事務局は東京池袋サンシャイン60階、38階に置いています。

今までの大きな活動としては、1990年、大阪で開催された「国際花と緑の博覧会」に、18世紀から19世紀のイングリッシュガーデンとして、フォーマルガーデンとモダンガーデンを出展。2000年、淡路島で開催された国際園芸・造園博「ジャパンフローラ2000」では、RHS Jとして初めてショウガーデンを出展。その後、当協会法人会員である千葉・君津にある内山ガーデン&アーボレイタム内に移設。RHS J記念庭園として保存管理されており、会員の学習の場として利用しています。また、毎年英国から講師を招いて「国際園芸フォーラム」を開催し、日英の園芸情報の交流の場を提供しています。

日本ハンギングバスケット協会が1996年に発足した際、ハンギングバスケットマスターを本部RHSの承認を得て、RHS Jよりマスターの称号を授与し園芸普及活動に努めています。

日本支部は現在、全国に3,200名の会員が登録されており、会員には、本部から直接届けられる「The Garden」と日本支部が発行する会報誌とともに、会員の園芸情報の共有手段としてセミナーや見学会を開催

し、活動しています。

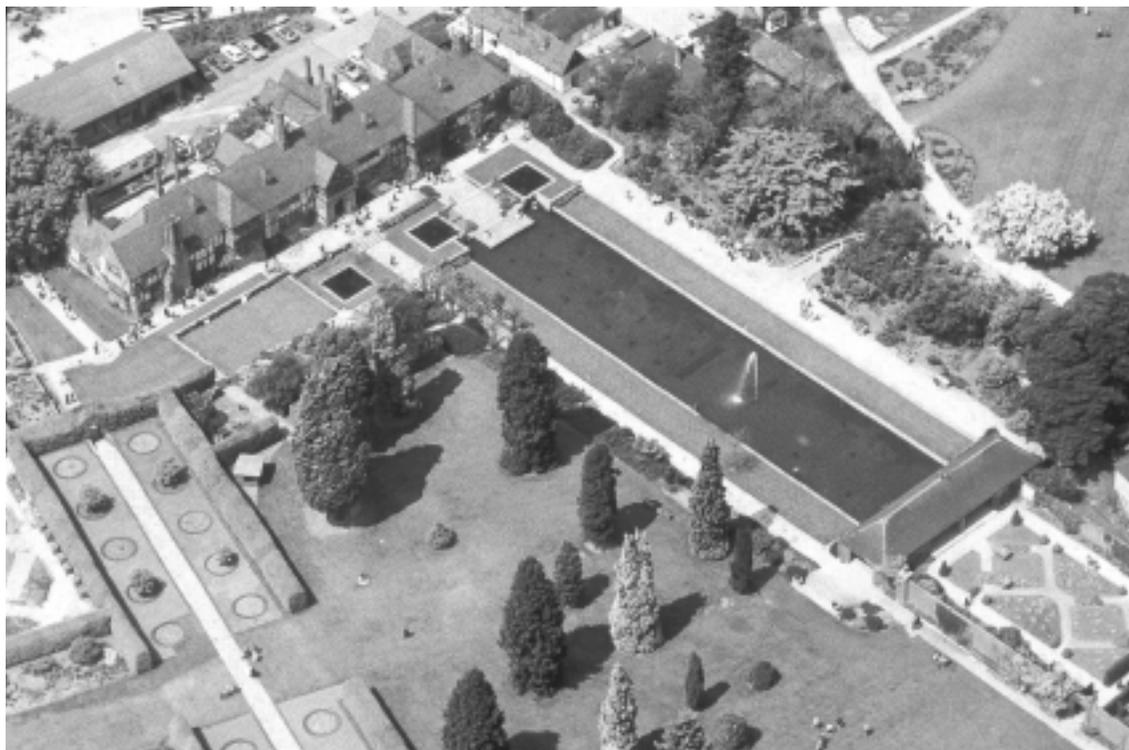
また、日本支部内に付属団体として、2001年コンテナガーデニング協会を設立。コンテナガーデニングが身近な園芸の楽しみであると同時に、園芸、造園・施工などの分野で活躍が期待されるプロを養成する「コンテナガーデニング専門講座」を開催。講座終了後、試験合格者には、「コンテナガーデニング・マスター」の称号を授与しています。

日本支部の活動として、まだまだ当協会の存在の認知度は低く、RHSおよびRHS Jの存在と活動について、大いにPRする必要があります。その機会として、来年、本部200年記念事業として、本部リンドリー図書館より**ボタニカルアートの原画展：400年の大系「植物画世界の至宝展」**を企画。

2005年、東京藝術大学の美術館(6月11日～7月18日)、神戸市小磯記念美術館(7月23日～9月4日)、そして福岡で開催される第22回全国都市緑化福岡フェアの開催中に展示公開し、九州地区における当協会のPRの場として期待をしています。

当協会として、本部創立200年という大きなモチベーションを活かして、発展と会員の拡大を図るチャンスにしたいと願っています。

RHSガーデン・ウィズリー© RHS



クの八重が咲いたので、切花を当時の青山市場に私がオート三輪で50本出したら平均80円で仕切られた。私の月給が5000円くらいの時代のことである。この事実から私は花きの実践教育に切り替えた。温室や畑で生徒が実習して生産した花を生産者と同じ花き市場に出荷していくらに売れたかまでみる。安かったら栽培のどこが悪いのか、切り前か、結束の方法か調べて改善するという実践教育だ。出荷もつねに私がオート三輪を運転し、同乗する当番生徒は市場で取引も勉強するという今の管理教育では考えられない実習であった。

実践教育も知識や技術の基礎がなければならない。わが国の花きは遅れていて、雑誌はもちろん、園芸学会でも花きに関する発表は乏しく、当時は米国の園芸学会誌「Proc. Amer. Soc. Hort. Sci.」しかなかった。しかしこれを読ませてもらうのが大変だった。千葉農専にはなく、もっている教授は藤井先生だけであった。おそろおそろ見せて頂けないかと申し出たら、渋い顔で家まで来て読むならいいいと許可してくれた。日曜にアルバイトの生徒を連れて先生宅に何うと先生は別人のように対応してくれて、小鳥かごが天井まで積まれた部屋で、当時はコピーなどないからザラ紙に書き写す作業を夕方までしたものである。藤井先生宅には数回通い、ここにはないバックナンバーは教育大(駒場)の岡田先生の教室、遠くは農林省の興津支場まで行ったものである。この殴り書きの英文を下宿先で翻訳するのも苦労があった。

花き農家を指導する仕事をしたい

都立農芸で10年たって、私の花き実践教育はもっと花き生産者を指導する業務につきたいという意欲に駆られた。たまたま静岡県花卉連会長で後に知事になった山本敬三郎氏の誘いで、静岡県有用植物園に転職した。県が南伊豆の花き振興のための予算をとり、花研究や農家指導をする担当であったが、植物園業務、花き研究、農家指導など、僻地農業での経験は紙面の都合で割愛する。

実践的な花き研究への挑戦

伊豆で私なりに3年間頑張っているとき、東京オリンピックに使う花のため、都が花壇苗生産と新農家育成のための研究員枠が一人取れたからこないかと東京農試から誘いがきた。都立農芸の卒業生も運動してくれて私も悩んだ末に返ることにした。しかし東京農試で待っていた仕事は、研究ではなく、カンナの球根を

20万球増殖するというものであった。この元球を農家に渡し400万球にしてオリンピックに使うが、農試での増殖業務は重労働の連続だった。

本来の花壇用花きの研究に戻れたのはオリンピック後であった。やがて私は花壇苗と鉢物を担当し、教育同様の実践研究にシフトしていった。農家がうまくできない技術を追求開発して、それを実践し、実際に市場に出荷し生産者と競い実証するものであった。シクラメンをはじめ、当時まだ農家で良品生産できなかったポインセチア、ハイドラングシアの研究では、技術を組み立てて試験生産した鉢を実際に青山市場に出荷して生産者の数倍の価格で取引された。この市場での実績はたちまち生産者に広がりレベルアップした。東京農試の研究活動は23年間に及んだがここでは省略する。当時の成果は、著述した「鉢花のプログラム生産(1),(2)」にまとめてある。

新時代の花き園芸への開眼

東京農試卒業直前、(株)ミヨシの創設者で先輩でもある三好劔男氏が八ヶ岳農場長としてこないかと、親友魚躬君を介してこられ、花きの種苗業界にも関心があったので退職直前に転進した。ここでの10年はまた貴重な体験となった。農場での育種現場の厳しさ、また、苗生産のカーネーション・ファクトリーの建設、第3農場(現在の営業育苗センター)の建設を任せられ、土地買収から設計企画、建設対応など貴重な経験を得た。世紀社長になって常務昇格後は海外業務にも参画し、世界の種苗業界にも目を広げることができた。5年の技術顧問の時代を加え、15年間は多くの知見を得て高齢現役の自負を守れ、社長はじめ関係者に感謝したい。

私は今も花き園芸界に新しい高齢の世界を開拓しようと試みている。定年退職、老後、悠々自適は好きではない。一生現役の証に「農耕と園芸」誌に連載して辛口批評で7年86回を迎えている(自画自賛)。

テクノ・ホルティ園芸専門学校での講義も若い学生に負けまいと、常に新しい分野の講義を構築している。新しい花文化(西洋・日本編)の講義を編集作成している。本年から講義もパワーポイントによる映像と口述による授業体系を実験開発中である。その他、これほど発展した花壇というカテゴリーがいまだに園芸にも、造園にも中途半端に関わって、学問的にも技術にも体系化されていない。これに対する挑戦も今、農業および園芸誌で2年間にわたり連載中である。ぜひご批判いただきたいものである。

不思議の島ニュージーランド

シャクナゲ・プライベートガーデン・農園視察

山 口 ま り



ブケティガーデンにて Mr. Keith Adamusと一緒に

2003年10月28日～11月4日実施。6～7月に予定されていたドイツのIGAやアイルランドの第13回海外園芸事情調査団が新型コロナウイルスの流行やイラク戦争の影響で中止になり、参加申込者の要望により急遽計画されたニュージーランドの旅であった。

南半球にあるニュージーランドは、日本とは季節が逆になり、日本の4～5月というところ。南島でも春の花がそろそろ終わり、夏の花に植え替えが始まっていた。

10月28日（火）

日本からの参加は27名。土砂降りの中、P.M.6:30の定刻よりだいぶ遅れて一路クライストチャーチへ向け離陸。

ニュージーランドの国土は、日本の70%ほど、人口400万人（羊は4760万頭）、オークランドが日本の東北地方南部、クライストチャーチが北海道中央部の緯度とほぼ同じ位置だが、西岸海洋性気候で夏の平均最高気温が22.8、冬の平均最低気温が7.8という、植物を育てるにはうってつけの気候である。また、東京と同じくらいの雨量があるが、平均して雨が降るようで、木々の幹には小型のサルオガセのようなコケが着生している。

10月29日（水）

クライストチャーチ

機中で一夜を過ごし、ニュージーランド時間（日本との時差は+4時間）A.M.10:30にクライストチャーチに到着。クライストチャーチも小雨が降る肌寒い天候。空港でロサンゼルスから参加される石原ご夫妻と一緒に総勢29名のツアーとなる。

ターミナルビルの駐車場の植え込みには青色の小花をびっしり付けたミヤマホタルカズラの群落やツツジ、なじみのない花木（*Choisya terrata*, *Pittosporum tenuifolium* など）が植え込まれ、あしらいに使われたニューサイランに、さすが原産地と思う。クライストチャーチの市街地へ向けバスを走らすと、銅葉のカレックス（？）が道路沿いに植え込まれて、街路樹や庭木としてニュージーランドの国花のコウハイ（*Sophrha microphylla*）が植栽され、黄色の花を満開に咲かせている。

クライストチャーチは人口35万人の南島最大の都市だが、市の中央部には両岸に広い緑地のスペースのあるエイボン川が流れ、街の半分の面積を占めるハグレ公園（182ha）があり、緑豊かなゆったりとした雰囲気のある都市である。最初の訪問は、クライストチャーチ大聖堂。その後、エイボンモナバール（Mona Vale）ガーデンに寄り、川沿いに作られた庭園を散策。シェードガーデンのコーナーに、定番のヒューケラやギボウシのほか、Chatham Islands forget-me-notといわれる



ニューサイランの植え込み



ディック氏の庭園

クライストチャーチ



Myosotidium hortensia
 がつややかな葉を広げ
 ブルーの花をつけてい
 る姿に出会った。

Chatham Islands forget-me-not

フジ、ツツジ、シャクナゲが満開のなか、2mにも育った *Pionia lutea* の姿にニュージーランドの温暖な気候をうらやましく思う。

昼食は、クライストチャーチ郊外の牧場地帯にある個人宅を訪問し、ニュージーランドの家庭料理をご馳走になる。リビングの前庭には、ワトソニア、パンジー、オダマキ、シスタスなど春の花が爛漫に咲き、淡いピンクの八重桜が印象的であった。

午後、クライストチャーチに戻り、ガーデンコンテストの入賞賞連の個人の庭園（ディック氏とブリックス氏）を2箇所見学。

その後ホテルにチェックインし、夕食までのしばらくの間、ハグレ公園の一角にある植物園の見学。ここでもシャクナゲの大木やウツギ、各種ツツジが満開。足元にはスキラ・カンパニュラタが群生している。公園内の草原にはバビアナが野生化して赤やオレンジ色の花が盛りであった。

夕食は、ホテルのレストランでのエディブルフラワーをあしらったコース料理。

11月30日（木）

ニュープリマスでシャクナゲと

空路、ニュープリマスへ。ここから北島の旅が始まる。雲の中の飛行となり、ニュープリマスも曇りがちの天候。ガイド氏曰く、「ニュージーランドでは夏以外は、一日のうちに四季があるといわれるくらい、天候は不順です」とのこと。

市内の住宅街には、いたるところシャクナゲの花が見事に咲いていた。富士山によく似た山容のタラナキ山周辺68のガーデンが参加し、「タラナキ シャクナゲ祭り」が10月24日～11月2日に開催されているのもうなずける。世界中で1500種ほどあるロードデンドロンのうち、タラナキ周辺では1000種が見られるという。

北島では、ニュージーランドクリスマスツリーといわれる *Metrosideros excelsa* が、パフのような真っ赤な花を咲かせている。

バスの車窓からニュープリマスの市街地を観光し、昼食のため谷筋に作られた庭の美しいB&BのTupare Gardenへ着く頃には、雨は本降り。食事中に雨が上が



プケティガーデン
 シャクナゲの大木と木生シダ



ホラードガーデン
 ツリーデージー（*olearia*）

ることを期待したが、期待はずれ。10m以上はあると思われる大木のダビデアが満開であった。

その後、Pukekura Park & Brooklandsを訪問。ここは、ニュージーランドの原生林が残されていて木生シダ、小型のヤシ、ニューサイラン、アロウカリアなどが茂り、いたるところ苔むしていた。まるで、映画の“ジュラシックパーク”のようで、今にも恐竜が姿を見せそうな雰囲気である。

10月31日（土）

庭園めぐり

相変わらず雨が降ったり止んだり、晴れたりで傘が離せない。

ナショナルトラストに指定されているHolland Gardensは、1927年からBernie Hollandがニュージーランドの自然の植生を生かしながら、世界中から集めた植物を植栽した庭である。園内にはツリーデージー(*olearia*)の1mを越える株が、白やピンクの花を咲かせていたのが印象的であった。日本では育たないということだ。

途中タラナキ山に掛かる鮮やかな虹に歓声をあげながら、山腹の原生林の細い道を走り、中腹にあるシャクナゲとツツジのコレクションで有名なプケティガーデン(Pukeiti)を訪れる。早咲きの種類はすでに花が終わっていたが、多くの種類は開花真っ盛り。80歳を過ぎているというMr. Keith Adamusの案内で公園内を見学。シャクナゲの多種多様な花に驚かされる。

薄日が差し始めた中、訪れたンガマクガーデン(Ngamamaku)は、Mr. Tony Barnes & John Soleが17年ほど前から整備を始めたという現在進行中の個人の庭園である。敷地内には小川が流れ、湿地帯の植物から草花、バラなどの花木まで、原生の植物と小高い丘の起伏をうまく利用した変化に富んだ庭である。



一枚の絵画を見るように



サルビア・レウカンサとオステオスペルマムが同時に開花している

オークランド植物園

11月1日(日)

ロトルアへ

ほとんどバスで移動の一日となる。

途中、トンガリロ国立公園の高原地帯に広がる湿原は、ニュージーランドの原生の姿であろう。葉の長さが3mほどもあるニューサイラン、褐色のスゲの仲間、イグサの仲間などの単子葉植物が茂り、草の間は厚くミズゴケのようなコケ類で覆われていた。ようやく冬が終わったところのようで、まだ、寒々とした景色であった。

ニュージーランド最大の湖、タウポ湖の畔のレークランドで昼食休憩。タウポ湖から流れ出るフカ滝を見学するが、コウハイが黄色の花を咲かせ、一同滝よりも植物に目が行く。

長いバスの旅が終わりようやく着いたロトルアは、温泉の町。先住民の文化を保護しているオヒネムツマオリ工芸村を訪れマオリの歴史と文化に触れた。園内の開けた場所にはギョリュウバイが2～3mにも伸びて、1.5cmほどの白い花を咲かせていた。ギョリュウバイをニュージーランドでは“マヌカ”といって、これから取れる蜂蜜を“マヌカハニー”といい、天然の抗菌物質と言われているということだ。

ロトルアのシンボルのガバメントガーデンを訪れ、チューダー朝様式のシンメトリーの建物、春の花が盛りの庭を見学。夜は、ホテルでマオリのショーとマオリの伝統的なハンギ料理を堪能。

11月2日(月)

オークランドへ

オークランドへ向けて出発。やはり今日も雨模様。少し遠回りをしてワイトモ鍾乳洞と土ポタルを見学。真っ暗な洞穴で淡い光で輝く土ポタルの幻想的な光景に、異空間に迷い込んだようでしばし現実を忘れる。

昼食後は、オークランド郊外の1964年から整備を始めたというエイリーズガーデン (Ayrilis Garden) を訪

れ、Mrs. McComell に庭園の歴史や庭を案内してもらい。入り江に面した小高い丘にあり、海を借景に見事な景色を演出している。ここも起伏を利用した庭で、ロックガーデン、ローズガーデン、シェードガーデンなど各コーナーが工夫されている。背丈50cmほどのシネリリアが野生化して林のあちこちに桃や青紫の花を咲かせている。南アフリカ原産の植物も見事に生育しうらやましい限りである。

ニュージーランド一の都市・オークランド市街に入る。噴火口跡の標高196mあるマウント イーデンの展望台にバスのまま登り、オークランドを一望する。

11月3日(火)

切花農家視察

いよいよ最後の日である。午前中は、日本へ切花を輸出している「インターナショナル&グローバルオークランドコーポレーション」の柳沢氏の案内で、大型シンビジュームの切花農家とカラーの切花農家を訪問。

昼食後、ニュージーランドの原生の植物やオーストラリアの植物が多く植栽されているオークランド植物園 (Auckland Regional Botanic Gardens) の見学。ここでは、秋の花であるダリアやサルビア、春の花のウツギ、ジャーマンアイリス、マーガレットや、オーストラリアのアニゴザントス、グレビリアなど、日本の常識では考えられない組み合わせで花が咲いていて、改めて不思議の国ニュージーランドと思う。

オークランドの中心部に戻り、午後は自由時間。それぞれがショッピングを楽しむ。夕食は、ハーバーサイドビルにてシーフードのフェアウエルディナー。それぞれが楽しかった1週間の話題に花が咲いた。

11月4日(水)

A.M. 9 : 30発のニュージーランド航空で成田へ。予定通り日本時間P.M. 4 : 30成田着。全員元気に旅を終え、多くのお土産を携え、帰路に着いた。

イギリス・アイルランドの園芸の粋を訪ねる

鈴木 司

今回はかねてから見たいと夢見ていたエジンバラ王立植物園をメインとした企画だった。この案は2003年にドイツ・ロストック市で開催の国際園芸博覧会（IG A 2003）とエジンバラ王立植物園の視察を計画し、募集開始後、アジアのSARS騒ぎで急遽中止した案件を、会員の要望により再度、ドイツとアイルランドを入れ替えて新たに企画したものである。

日程は2004年6月27日(日)～7月5日(月)の9日間、参加者17名、旅行主催近畿日本ツーリストで行った。

6月27日(日)

ロンドン経由ダブリンへ

午前8時55分に全員集合。予定より少し遅れて、11時25分に英国航空（BA）で成田国際空港を発ち、ロンドン・ヒースロー空港に現地時間15時8分に到着した。ここでアイルランド航空に乗り換え、ダブリンに向った。離陸が大幅に遅れ、ダブリン市内のメスピルホテルに着いたのは21時30分という長旅になった。

6月28日(月)

ナショナル・ボタニック・ガーデン

ホテルを朝9時に発ち、開園早々に入園する。当園は1795年創立で200年の歴史がある。園内はよく整備され、鮮やかな緑と澄んだ空気に、彩り豊かな花があふれていた。ボーダー花壇にはペンステムン、フロックス、カンパニユラ等と、各種のハーブが植えられ、その先のロックガーデンにはアルペンフローラが咲き、小規模ながらバラ園も満開だった。中央に温室が連なり、食虫植物、洋ランをはじめ、種類は豊富で管理もよかった。園内には明るい広葉樹林があり、リスが飛び回っていた。

パワースコート・ガーデン

広大な土地をもつパワースコート伯の屋敷で、城館風の建物と広い庭園の形式の中世の姿を残している。このガーデンの設計はベルサイユ宮殿を模して造られたという。メインはイタリア式庭園で、左側奥に日本庭園、右側にはバラ園と見事なボーダー花壇が満開だった。ボーダーには冷涼な気候帯の花が粋を競っていた。

6月29日(火)

トリニティ大学図書館

午前にまず市内のトリニティ大学図書館に入館。紀元前800年にまとめられた世界的に貴重な「ケルズの書」4巻を拝観する。トリニティ大学は1592年、エリザベス1世の創立で、古典的宗教書20万冊収蔵の図書館に圧倒される。この後、同じく市内にあるセントパトリック大聖堂の庭を經由して、古いビールの名門ギネス社を訪れる。ギネス・ストアハウスの7階にあるグラビティパーブ名物の黒ビールを味わい、ダブリン市外の眺望を楽しむ。

午後、ダブリンから一旦ロンドンへ飛び、さらにスコットランドの首都エジンバラに行き、市内のラマダ・ジャービス・エジンバラホテルに宿泊する。

6月30日(水)

エジンバラ植物園

午前10時の開園を待って入園。集合時間を14時としてフリーに見学する。園内は新緑の芝生が美しく広がり、右手のルートを行くと大木の斑入りカエデをはじめ、明るい広葉樹の大木が林を作り、樹下の芝生にはローンデージーが可愛い。枝道に入るとメコノプシスの群落がやや盛りを過ぎた花をつけ、その先には桃、黄、紅、白のクリンソウの群落が咲き乱れていた。

さらに行くと、大規模なロックガーデンに導かれる。



王立エジンバラ植物園のロックガーデン

この旅の一番の目玉である。一步入ると、そこには巧みに設計された自然風の岩山と、隅々まで配慮して植えられたアルペンフローラの見事さに一同ため息をつきながら感動にひたる。ロックガーデンに満喫してから、ユリノキの大木の林辺の池のカモの親子を眺め、大温室に向う。

そこに先生に引率された30人ほどの幼稚園児がきた。欧米の植物園にはこのような子供たちが先生に連れられて熱心に植物や動物の観察をしている姿が見られる。幼少時のしっかりした自然観察の教育体系ができてきているようだ。

大温室は無料だが、入口に募金箱が置かれ、入園者は任意に小銭を入れている。展示植物は、キューに比べると物足りない。近くの芝生にアローカリアの大木が枝を広げており、北緯56度の地が信じられない気分となった。

アルペンフローラの温室があるのを見落とし残念。

7月1日(木)

パース周辺のガーデン廻り

9時にホテルを発ち、エジンバラから北のフィヨルド湾を渡り、パースに向かう。フィヨルド湾には日本人の渡辺カイチ氏設計という美しい鉄道橋が望まれた。沿道にはヤナギランの群落が紅紫色に咲いている。

・チェリーバンク・ガーデン

スコッチウイスキーのベル社が社員向きガーデンとして設けたヘザー(エリカ類)ガーデンで、緩やかに下る斜面に1,000種、55,000株が世界中から集められている。花の時期(8~10月)には早かったが、葉の色がカラフル。素晴らしいガーデンを完成させており、一見の価値があるガーデンとして推奨したい。

・ブランクリン・ガーデン

パース市街からTAY川を渡った所、植物を愛したレントン夫妻が作りあげたがガーデンを訪ねる。広さは2エーカーと大きくはないが、夫妻がプラントハンターに依頼して収集したヒマラヤ・中国地方の花々が豊富に植栽され、驚くほど多様な種類が美しい花を連ねて、見応えがあった。

・ドラumont・キャッスル・ガーデン

パース市の西方クリフの町にある。ドラumont・キャッスルは、この地方に広大な領地を持つドラumont家の居城で、戦乱を生き抜いた堅固な城郭には想像できないような見事な庭園がある。



ドラumont・キャッスル・ガーデン(スコットランド)

石の城門を入ると、右手約10mの城壁の下に大パノラマが広がり、一同声も出ないほどにしばし立ち尽くした。ここにはフォーマルガーデンの典型、究極のパーテマ(刺繍模様花壇)があり、しかも見事に管理が行き届き、チリーつない。1842年にビクトリア女王の訪問にあたって、造園家ケネディ親子が原型を作ったものという。城郭をバックにしたガーデンの美しさに、誰もが思わずシャッターを切っていた。

7月2日(金)

ブレッシingham・ガーデン

午前4時のモーニングコールで起き、エジンバラから空路ロンドンに9時過ぎに到着。だが迎いのバスがハイウェイの事故で未着。結局11時30分に出発。ロンドンの東北方向のノーフォーク地方の広々とした麦畑に輝くような菜の花畑が点在する中を走り、午後2時半に目的地のブレッシingham・ガーデンに着く。

ここはアラン・ブルーム氏が220エーカーの土地に宿根草と高山植物専門のナーセリを創設したもので、宿根草では世界有数のメッカといえる。そのモデ



ブレッシingham・ガーデンのコンiferのモデルガーデン

ルガーデンとして、約5,000種といわれる多様な宿根草と庭木を植え、素晴らしいガーデンを整備している。モデルガーデンは二つ、一つは宿根草を主体とした10区のガーデンで、色とりどりの花で埋まっていた。

もう一つは隣接して、子息のエイドリアン氏が、フォギーボトム・ガーデンとしてコニファー類と宿根草を組み合わせたものである。カラフルなコニファーガーデンに一同賛嘆の声を上げ、いつまでもリラックスしていたい気分を味わった。ナーセリーには豊富な宿根草類の苗と園芸グッズがあふれ、それぞれショッピングも楽しんだ。

ロンドンへの帰途、ケンブリッジ大学の街に立ち寄り、夕食をとってから、古い伝統ある大学の街並みや、ニュートンが万有引力を発見したゆかりのリングの木などを見学する。日本には見られない何やら威厳のある大学街だった。ロンドンのホテルは中心街のロンドン警視庁近くにあるジョリーセント・アミューズメントホテル。

7月3日(土)

シェークスピアの生地

ロンドンの西北方の国道40号線で、シェークスピアの生地ストラドフォード・アボン・エイボン町へ行く。この町はシェークスピアが生まれ、後半生に再び住んだ所で、花を楽しんで過したゆかりの庭が公開されている。庭には樹齢400年の桑の老木が葉を繁らせ、シェークスピアが愛したというバラ園と、娘の夫が医者とのことで、日本では禁止されているケシが紅、白の花を咲かせているボーダー花壇が美しかった。

ヒドコート・マナー・ガーデン

午後、有名なコッツウオルズ地方を通り、高台にあ

るヒドコート・マナー・ガーデンを訪ねる。ここはアメリカ人ローレンス・ジョンストンが30年の歳月をかけて独力で作りあげたガーデンである。200mに及びイチイの生け垣で仕切られた緑の芝生の道がメインとなり、両側に生け垣に区分されたホワイトガーデンやレッド、イエロー、パステルカラーなどのカラーガーデン、オールドローズ等のテーマガーデンを見ることができた。このガーデンはナショナルトラストに寄贈され、そこが管理している。

夜はホテルの近くのレストランで、恒例のさよならパーティーを開く。7日間の見学コースの楽しい話題でにぎやかな夕食会となった。

7月4日(日)

ウイズレーガーデンから帰国へ

最後の日は午前中にロンドン市内をバスで観光する予定だったが、参加者が相談して急遽変更。RHSのウイズレーガーデンを時間いっぱいまで見ることにした。9時の開園を待って入園。各自、自由に目的の花を求めて回ることになった。ここは第1回の花葉会の海外調査で訪れた所であり、14年の間に一層充実した内容となっている。

中央のボーダー花壇に始まり、ガラス室でコリウスとフクシアの品種展示を見学。次にアルペンフロアのガラス室を訪ねた。ここには満開の株が1鉢ずつベッドにきれいに配置されている。すべてをデジカメに撮ることができた。

ロックガーデンを降り、全員満足してバスでヒースロー空港に向う。そして全行程を無事終了し、帰国の途についた。



ヒドコート・マナー・ガーデン



RHSウイズレーガーデン

園芸古書の解説

～岩佐蔵書より～

岩佐園芸研究所

岩佐吉純

(「花葉」22号p61より続く)

5-1) *Nova Plantarum Animalium et Mineralium Mexicanorum Historia* (写真16, 17)

Hernandez, Francisco (1514-1587) 著

ヘルナンデスはスペインのフィリップ2世の侍医。1570～1577年の7年間、Flora と Fauna の研究調査に出かけ、メキシコに4vol.の記述と、10vol.の挿画の記載のコピーを残した。スペインに戻ったヘルナンデスは報告書を出版すべく王に提出したが、エスコリアル宮殿に保存され、彼の生存中には出版されなかった。1651年ローマでようやく出版され、世界初のダリアとウチワサボテンの記述といわれたが、ダリアについては⁶⁾のパディアヌス・マヌスクリプトのファクシミリ本が1940年に出版され、2番目の記述となった。(写真

18) 31p. Acocotlis、(写真19) 372p. Cocoxochiti で、明らかに八重咲きが描かれているので、論議を呼んでいる。野生の原種では八重咲きをみることはないからである。

6-1) *Badianus Manuscript* (写真20)

Emmart, E. Walcott (1940 ファクシミリ本) 著

パチカン宮殿の図書館で忘れ去られた一つのコーナーにあったのをProf. クラークが発見した。Martinus de la Cruzの本を Juanne - Badianus がラテン語に翻訳した1552刊の本である。(写真21) T59 Cohuanenepilli は *Dahlia coccinea* と考えられる。

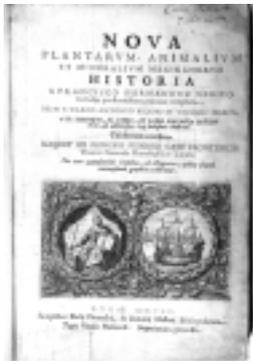


写真16



写真17



写真18



写真19

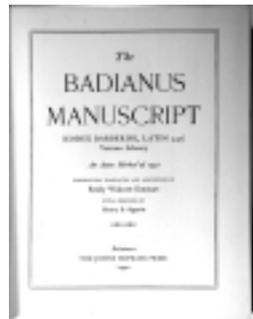


写真20



写真21

7-1) *Icones Et Descriptions Plantarum* (写真22)

Caranilles, Ant. Josephi (1744-1804) 著

1798年にメキシコ植物園の Don Vincente Cervantes がスペインのマドリード植物園長に種々のメキシコ市

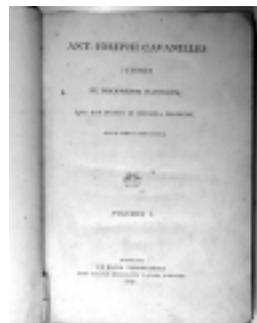


写真22



写真23



写真24



写真25

近辺の植物の植物体を送った。その研究をパリから来たカバニールがあたり、vol.1 (写真23) T80 *Dahlia pinnata*、(写真24) T14 *Cosmos bipinnatus*、(写真25) T81 *Zinnia violacea*、vol.3 (1795~96刊) T265 *Dahlia rosea*、T266 *D. coccinea* 等、多くのメキシコ産植物が描かれた。なお、ダリアの原種については Dr.Hans Hansen (コペンハーゲン大学植物園) の研究の結果、*D. coccinea* の野生に *Tetra* があり、1996年に新しい種と認められた *D.sorrensenii* が *Tetra* の野生種で、その自然交配の結果、*D.pinnata*、*D.rosea* 等がみられ、古い時代にこの両種の自然交雑の後代があり、それらがスペインに送られたらしいと推察され、*Tetra* のため、変異が非常に早く拡がったし、分離がみられたらしい。

8-1) Curtis Botanical Magazine or Flower Garden Displayed

Curtis, William (1746-1799) 著

カーティスはロンドンのナーセリ マン・リンネ協会創立者の一人・叔父の薬種商の徒弟、後 St.Thomas 病院の薬種商・1779年ランベスにロンドン植物園を開園(現ウォーターloo 駅近く)。その趣意書には“植物の医薬の効能のみならず、農業工業生産に役立つ植物の有用知識の普及をめざす”とあったとのこと。ボタニカルマガジンは1787年2月創刊。毎月1シリング、3枚のカラー版をつけて発売。プラントハンターのマッスンが南アフリカで活動し、多くの植物をキュー植物園に送ったのが開花し、この雑誌を飾ることができた。カーティスは14巻の出版中に死亡した。

カーティスの死後、フッカー、ウィルソン等がその志をついで編集にあたり、1983年183巻で一応の区切りをつけた。後Kewマガジンとして1984年から出版されたが、1995年12巻から再びカーティスボタニカルマガジンとして、現在20巻、マーチン リクスが編集に

あたって継続されている。

vol.1 T8 (写真26) *Helleborus niger*

vol.4 T119 (写真27) *Strelitzia regine* (別刷2ページ大)

vol.96 T5813 (写真28) *Dahlia imperialis* 帝王ダリア

Kew Magazine (写真29) vol.4 part3 T82 (1987) (写真30) *Clematis marmoraria* ニューゼalandにて発見されたつるのないクレマチスの新種が掲載された。



写真26



写真27



写真28



写真29

写真30

9-1) Hortus Kewensis (写真31)

Aiton, William Townsend (1731-1793) 著

父 William Aiton はチェルシー葉草園のミラーのアシスタント・5,500種のキュー植物園の目録を Hortus Kewensis として3巻にまとめ、1789年刊行。父のもとでアシスタントを務め、RHS創立者の一人・11,000種のKewの植物を5巻のリストにまとめて刊行。

vol.4 (写真32) 159p. Pelargonium だけで102種がリストされ、内マッソンが南アフリカから47種を送ったことが記されている。



写真31



写真32

10-1) The Botanical Cabinet Colored Delineations of Plants from All Countries 20vol. (写真33)

Cornrad Loddiges & Sons Conrad Loggiges (1739?-1826) 著

Cornrad はオランダ人で、Hockey Nursery を買収・John Bostram からアメリカ産の植物を購入し、英国に紹介したことで知られる。

vol.1 (写真34) T71 Delphinium chinensis (1818)

vol.10 (写真35) T916 Primula sinensis (1824)



写真33



写真34



写真35

10-2) Catalogue of Plants in the Collection of Conrad Loggiges & Sons (写真36、37) 1823年刊

George Loggiges (1786?-1846) 著

George は蒸気のガラス室を考案し、洋ラン栽培の効率化を最初に図った人。農場の経営と Botanical Cabinet の監督を続けた。カタログには約800の品種がリストされている。



写真31



写真37

11-1) The Florist Directory, A Treatise on the Culture of Flower 1822 刊

Maddock James (父) (1715-1786)

Maddock James (子) (1763-1825)

Maddock は Walworth Nursery を創業。1765~75年既に価格表を発行していたといわれる。附としてダリアの栽培が見られる。



写真38



写真39



写真40



写真41

p.9 (写真38) *Dahlia superflua rubrapleno*
1808年にはダリア八重咲が育成された記録がある。

p.3 (写真39) *Tulip & Anemone*

チューリップは Bizarre 咲、アネモネ・コロナリア八重咲。この頃球根を分球して増殖し、品種となっている。日本の吹詰咲赤は原名ドンファンときいている。

p.4 (写真40) *Carnation Scarlet bizard, Crimson bizard*

p.5 (写真41) *Carnation Pink picotee, Laced pink*

注：カーネーションはフローリストの花の一つ。プリムラ、アネモネ、ラナンキュラス、ヒアシンス、スイセン、チューリップ、ナデシコの8種をフローリストの花という。労働者の庭で多くの時間をかけて栽培、改良したという。スコットランド ペズリーは特にカーネーションの複雑なパターンを改良し有名。

12-1) *Flore des Serres et des Jardins de L'Europe*
23vol. 1845 ~ 1883年で完成。(写真42)

Van Houtte, Louis Benoit 著 (1810-1876)

Van Houtte はベルギーの園芸の父といわれる園芸家。ブラジル、グアテマラ、ホンジュラス、ケープベルデ諸島から植物を集め、中国、日本、アメリカ、ヨーロッパ全土からコネクションをもった。

Gendbrugge 農場で大発展。朝2 ~ 3時から夜8時まで

で働いたといわれ、グロキシニア、アザレア、椿、球根ペゴニアを特に改良した。

T199 ~ 203 (写真43, 44, 45) (1847) *Victoria regia*

T239 ~ 242 (写真46) (1847) *Azarea indica Exquista*

(写真47) *A.i. striata formossima*

T293 ~ 294 (写真48) (1847) *Rhododendron javanicum*

注：Victoria regia (= *V. amazonica*)

ドイツのヘンケがボリビアで1801年発見。フランスのボンブラン、同じく1820年ボリビアで観察。英国リンドリーは1857年完全なモノグラフ発行。英国パクストン、1848年11月チャッツワースで開花させる。



写真42



写真43



写真44

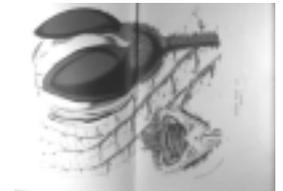


写真45



写真46



写真47



写真48

(「花葉」24号に続く)

ペチュニア・アルチプレーナ

(*Petunia alti plana* T. Ando et Hashim. 1993)

千葉大学園芸学部 安藤敏夫

南アメリカ大陸の温帯から亜熱帯にペチュニア属は分布する。亜熱帯では生息地が高地に限られるし、分布の最南端は南緯39°00′、日本なら岩手県平泉に相当するから、ペチュニア属は温帯性と言うのが正確だろう。ならば、どうしてスタンダード型(非カスケード型)の種子系ペチュニア品種は寒さに弱いのだろうか。

多くの現代花卉は育種の歴史を200年前にさかのぼれる。ペチュニアの場合、1830年代のイギリスにそれは始まる。大航海時代の末期、当然まだ帆船の時代である。当時のプラントハンターが近づけたのは、天然の良港か、その時代に既に発達していた原住民の街だけであつたらう。そしてそこは将来、大都市に発展することが約束された場所でもある。だからその時代にルーツを辿れる花卉はどれも、その親が現代の大都市で採集されている、という不思議な歴史をもつのである。

ペチュニア品種は、アキシラリス(*P. axillaris* = *P. nyctaginiflora*)とインテグリフォリア(*P. integrifolia* = *P. violacea*)の雑種起源と記録されている。両親はどちらもウルグアイという小国、あるいはその周囲のアルゼンチン領かブラジル領で採集されたことは間違いない。ウルグアイの首都=モンテヴィデオは南緯35°で静岡と同じ緯度である。だがそこは沖に寒流が流れる常春の国、リンゴ園とレモン園が共存する半乾燥の大地である。だから、日本の夏にも冬にもペチュニアが弱く、梅雨時に傷んでしまうのも無理はない。

だがペチュニア属の分布はウルグアイだけではない。写真はブラジルのサンタ・カタリーナ州東部と、リオ・グランデ・ド・スール州北東部の標高600m以上(特に1000m以上)の熔岩台地上に生息するアルチプレーナである。ブラジルとはいえ、そこは雪も降る激しい気候の土地である。こうした土地では寒さにも暑さにも強くなければ生き残れない。

1種を除き、ペチュニア属はみな多年草である。もっとも栄養繁殖器官をもたないのでせいぜい2~3年の寿命だから、短命な宿根草と表現できよう。ところ



ペチュニア・アルチプレーナ

がこのアルチプレーナは例外で、地表を匍匐する茎から不定根を生じ、また次々と側枝を生じて地表を覆い尽くすような巨大なマット状に広がる完全な多年草である。種子から生じた最初の根はゴボウ根となって年々肥大し、太さ10mmを越えることもある。新しく拓かれた道の斜面にはたいがい生えている。石の多い痩せた陽地、伐採されたストロブ松の植林地などにも好んで生える。直径2m程度の株は普通で、直径5mに達する巨大な一株を見たこともある。斜面に生じた株の枝は必ず下垂している。枝は細くしなやかなので、他の種のように簡単に折れることはない。だが、その場所にイネ科植物がはびこってくるようになると、次第に消えて行ってしまう。森林性の種を除くと、ペチュニア属の種は基本的にこうしたパイオニア植物と思われる。

私とブラジルに帰化した植物学者=橋本悟郎は、ブラジルからペチュニア属の7新種を発見して記載している(それにアルゼンチン・ポリヴィアから1亜種)。ペチュニア属からカリブラコア属が切り離された結果、たった15種の小属になってしまったペチュニア属の半数近くの種を記載する幸運に私たちは恵まれたのである。正直なところ、この有名属にまだ新種が眠っていたということ自体が驚きである。日本の園芸家としてこの種を記載したことを誇りに思う。それ故、墓場までもって行かねばならない事実も少なくない。

有限会社グリーンアトリエひらきゅうの挑戦

(有)グリーンアトリエひらきゅう

平 間 拓 也



(有)グリーンアトリエひらきゅう 農場風景

はじめに

私は平成13年の3月に花卉研究室を卒業して、実家の(有)グリーンアトリエひらきゅうに就職しました。現在は顧客との商談・生産計画・現場管理を担当しています。

私の会社は主にハーブ(百数十種)のポット苗を生産しています。その他、ラベンダーの鉢物、栄養系のピオラを作っています。年間の出荷本数は150万本くらいで、主にホームセンター(以下HCと略します)に出荷しております。関東・東北・北陸あたりを中心に、一部は北海道や九州へも出荷しております。

基本的に市場に出荷するという事はなく、問屋を通しての販売になっています。直取引というのほとんどなく、企画や商品の打ち合わせだけをして、営業は問屋に任せているという状態です。

施設はほとんどがパイプハウスで、会社の近所に3,000坪、車で40分くらいかかる山の上に800坪あります。従業員はパートを含めて25名で、繁忙期は期間限定のアルバイトを入れて35名くらいになります。

ひらきゅうの販売形態

当社の特徴は出荷形態にあります。ハーブは雑草みたいなもので、作る事に関しては全然難しい事はありません。素人のパートさんが管理しています。よその

方が良いものを作っている場合もあると思います。

その中で当社がなんとか生き残っているのは、販売に関して特殊な事をしているからだと思います。店にハーブコーナーを提案して、そのスペースに応じて定番と呼べる20~30品種くらいをSSトレイ(24個の穴の開いたトレイ)に入れて並べます。並べた品種にはそれぞれJANコードをつけて、品種ごとに発注をかけられるようにしています。そして週末に売れたものを品種ごとに店が発注をあげてくるので、それを週末までにダンボールに箱詰めして宅配便で届けて補充します。イメージとしては、コンビニに並んでいるガムやジュースの売り場みたいな感じです。発送はSSトレイが2枚入る箱に入れて出荷し、発注の単位は1品種6ポット(1列)単位で、発注を48ポット(トレイ2枚分)の倍数で、どんな組み合わせでも発送します。

この仕組みの良いところは、発注単位が小ロットでかつ発注から納品までの時間が短いため、店にほとんど在庫を置かなくても良いという事です。HCからすれば、ひらきゅうのハウスが自分の店のストックヤードみたいなもので、必要になりそうだったら宅配で各店に送ってもらうという状態です。

この棚割りで単品リピート発注の仕組みができる以前は、“ハーブティーセット”のようなセットでの販売でした。売れる品種は売れているのですが、売れない品種がいつも残っているので店からすると売れていないような印象を受けて、売れ筋の品種は売り切れているのにリピートの発注があがってこないといった状態でした。売れるものに偏りがあるからという事で、数品種しか置かないのでは売り場にはなりません。「ではどうするか?」という事になり、「ならば売れるものだけ補充すればいいんじゃないの?」という事で、地元のHCで始めました。そうしたら、リピート発注による売上がぐんと伸びて、店頭でのロス率も一気に減りました(店頭ロスは5~10%)。

棚割りするうえの苦労

ただこの仕組みは店側には都合が良いのですが、在庫のリスクは全部こちらの責任になってしまうので、その管理がとて大変です。出荷する時は100店舗あったら100通りの発注があるのを、トレーに移しかえて（当然ながら全てラベルを挿して）出荷するので、手間が恐ろしくかかります。

HCに納品をする場合は荷物と納品書を同時に着けなければならないのですが、HCの発注というのはオンラインでデータを飛ばしてきて、そのデータでそのまま納品書を発行するという仕組みが多く、発注に対して在庫が無い状態（欠品）が生じると、その自動で発行された納品書を手書きで直すという作業が生じます。この作業もかなりの手間になるので、作り過ぎたらこちらのロス、足らなくても無駄な作業をしなければいけない。発想は良かったのですが、それをやりきるという事は非常に大変でした。繁忙期は事務処理で毎晩のように2時とか3時くらいまでかかっておりました。

しかもハーブというのはすぐ草丈が伸びるので、商品として保てる期間がとて短く、長く在庫しておく事が出来ません。ですから初めは生産過剰によるロスや欠品が大量に生じました。

面倒な事に、店としては隣の店と同じものが並んでいるという状況は自分の店のオリジナリティという意味で好ましくない。ということで、各HCでラベルが違います。さらにHCはJANコード管理をしている所がほとんどなので、店頭売価の変わるもの（別規格のもの）というのはJANコードのシールを貼り変えて出荷しています。JANコードを間違ってしまうと店ではレジが通らなかつたり、単価が違ったりするので大変な事になります。ですから当社の繁忙期の出荷は、



出荷風景

100種類弱のアイテムがそれぞれ5種類くらいのラベルで、6ポット単位のアソートで100店舗に対して出荷するという気の狂いそうな作業になります。それを多い時は1日に3万ポットくらいこなします。荷物が着かない等の問い合わせも、こちらで運送会社に問い合わせさせて対処します。

デリバリーに関してはある程度完成されているので、HCのバイヤーも問屋も初めの流れさえ作ってしまえば、あとは各店の担当者が発注をあげて、そのデータで物がすぐ納品されるという状態になるので、労力を使わなくても済みます。

ただこのようなデリバリーをするには当然ながら、その処理をするための事務員や作業員が必要になってくるので、その細かい作業をしない場合に比べて、経費がだいぶかかります。単価がよそよりも高いという事で、いろいろつつかれます。でもよそから多少安く買ってきて、売れ残った品種がそのままロスになってしまったらしょうがないのではないかと考えています。この仕組みを使えば、品揃えを保ちつつ、売れるものを売れる時にしっかり入荷できるので、だいぶ無駄な仕入れというものを減らす事ができます。事実、この方法を採用する事により店では売上も上がっていますし、店頭での廃棄ロス率も減っています。

ここ数年の流れ

この数年はHCが店数を増やし続けている影響で、たとえ既存店の出荷本数が減っても新店が増えている分本数が増えるという現象が続いていて、その注文をこなす事に追われていました。品種によっては棚割しているのに欠品してしまうというような事が発生してしまいました。店での在庫がなくなって、発注があるのに在庫不足のために出荷できない事が生じると、店の棚もその分空きがでるので売り場効率が落ちます。もしくはその空いたスペースにハーブ以外の植物が置かれ、ハーブのスペースが減るという事が発生します。

このチャンスロスをなくすことが売上増加につながる。ですから単純に、この欠品をなくすための努力というものを続けました。あまり問い合わせのこない品種を大幅に削り、定番の品種の生産割合を増やして管理を簡単にし、毎週の在庫状況をデータベースにして、前年までの出荷データと比較し、生産量と発注量のギャップをできるだけ少なくする努力をしました。結果として以前と比べ、だいぶ欠品と生産現場での口

スを減らす事ができました。

ところが、今年になって店のリピート発注が減るとい現象が起きました。店数が増えている事によって、初回の全店投入数は伸びるのとチラシがからんだ時の発注は増えるのですが、その他の店発注の分が減っているのです。各店からあがってくるリピート発注というのは売れているか売れていないかを判断する大事な基準なので、とてもよくない傾向です。

考えてみると、ここ数年、付き合っているHCの店数が増えることによって必然的に増加する需要によって売上を伸ばしていたもので、こちらから需要を作り出していた訳ではなかったという事に気がきました。この数年は店数の増加に対応する事に追われ、全く新しい提案をしていませんでした。店や問屋からしてみれば、ハーブは売上の比重が低いわりに面倒な商品で、他にやらなければならない事がいっぱいあり、あまり時間をかけている時間はないようです。ハーブを忘れさせないためにも、こちらからもっとアプローチをかけるべきだったと反省しています。

今後店での売上を作るために

最近では既存店の売上が下がるのが当たり前のような世界になっていて、新しいお客さんや商品を作っていないと売上は落ちていきます。常に新しい事をやっていく必要があるのです。

今後、当社がすべき事は、ハーブに特化して幅を広げていく事だと思います。以前は宿根草の面白そうなものを導入して作っていたのですが、やはり宿根草が欲しかったら宿根草屋さんに行くし、山野草が欲しかったら山野草屋さんに行くわけで、当社が中途半端に作ったからといって売れないです。

幸い当社はハーブの生産者としての認知はされているので、ハーブ屋として店の人がもっとハーブを売りやすくする努力と、商品力を上げる努力をする事で売上をあげていくしかないと思っています。ハーブは切り口次第でいろいろな方向にもっていけます。まだ世間に紹介されていない部分を掘り上げていけば、商品としての広がりがもっと出ていくと思います。

まずは店の人が売りやすいように、たくさんあるアイテムを売れ筋・出荷時期・利用法等について整理します。それとハーブを売る場合の年間スケジュールをテーマも絡めて、こちらから提案するようにしたいのです。



各荷物は宅配便で配送

いろいろな品種を置いても、売れる品種というのは、誰でも知っているような定番ものになります。でもそれでは退屈な売り場になってしまうので、売り場の一部に変化をつける必要があります。今までは企画物を思いつきで作っていて、提案する時期が遅れて売り損ねる事があったので、年間の大まかな提案はあらかじめ、しておくつもりです。売り場で商品の特性を消費者に伝えるために、POP等の販促物も充実させようと思います。今まではハーブを知っている人だけにしか売っていなかったため、ハーブを知らない人達が衝動買いしてくれるような提案を心がけます。

消費者に対するフォローとしてはホームページをしっかり活用させたいです。自社ラベルにはホームページアドレス (<http://www.hirakyu.co.jp>) をつけているので、商品を購入した人は観ることが出来ます。まずは消費者が栽培や利用法を簡単に検索できるようにしたいと思っています。栽培に関しては生産者がある特性を一番よく知っているはずなので、それをもっと消費者に伝えたいと思います。直売した時のお客の反応を見ると、枯らす心配をしている人が多いので、そういう不安を少しでも軽減してあげたいと思います。

ハーブの簡単な利用法も紹介していきます。本に書いてある事は丁寧すぎて敷居を高くしてしまっている部分もあるので、ハーブは簡単だということをもっとアピールし、生活の一部に入れてもらえるようにしたいのです。ホームページはたいしたお金をかけずに情報を発信できるという事と、いくらでも情報を載せられるという事でとても魅力的です(ラベルやPOPはスペースが限られているので)。また、消費者の意見もダイレクトにくるので、消費者がどんな事を考えているかとても参考になります。

販売チャンネルとして、ガーデンセンターや園芸店

のような専門店ルートをもう少し開拓したいという思いがあります。今は売上のほとんどがHCになっていきますが、当社のシステム（棚割して多品目を小ロットで出荷）はガーデンセンター等の売り場の方が生きるのはないかと思っています。

HCは効率よく売上が作れて非常に良いお客さんなのですが、多店舗展開で人手が足りていない事が多く、最近ではせっかく棚割しているのに、売れたものの発注がなかなかあがってこないという事があります。そうすると当社の単品発注できるという仕組みの意味がなくなってしまうような気がします。その点専門店というのは店の担当者の意識が高く、売り場や商品の管理がしっかりしているのも、アイテムの単品管理という仕組みが生かされる気がします。

HCとの差別化をしなければならないので、今、専用のラベルを新しく作っているところです。品揃えを増やす事や規格を変えたものを作るという事もやってみようつもりです。

異業種への取り組み

これからはなんとか違う業界に手を出したいと思っています。ハーブは園芸以外にもいろいろな業界で用いられている（むしろそっちの方がずっと多い）のがとても面白いところです。当社なりの切り口で、何か面白いものがないものかと、機会があればデパートの地下売り場やハーブショップを歩いています。

異業種に手を出したい一番の理由は、シーズンによる売上の落差をなんとか緩和させるためです。どうしても春に売上が集中（3～5月で売上の6割くらい）して、その他のシーズンになるとぐんと売上が落ちてしまう、というのが一番の悩みです。

春の仕事量をこなすにはある程度の人材は確保しておかなければならないので、売上がない時期が続くとその人件費が重荷になってきます。長い期間をかけて仕込むものも多いので仕事はあるのですが、お金になるのが何ヶ月も後になるわけですから、その間の運転資金の調達が本当に大変です。オフシーズンにもなんとか売上を作ろうと、下請けも含めて仕事を探のですが、春以外に出荷するものがないのはどの生産者にも言える事なので、供給は十分に足りているという状態です。

ならばハーブという素材を生かして、売上の波がない他の業界に手を出したいと思っているわけです。別

業界で使われているハーブというのは、輸入されたものと水耕栽培のものが多いのですが、その隙間として国産や土耕（水耕よりも成分が濃い）をうたい、一部の理解してくれる人達に売っていきこうと思っています。具体的にはドライハーブの商品化を考えています。私の地元は宮城県蔵王町という所で、それなりに知られた観光地です。ですから、地元の観光関係の人達もまきこんで、蔵王を“ハーブの郷”となるように持っていきたいと思っています。ある程度業界や消費者に対する当社のメーカーとしての立場を確立させ、価格競争の波から抜け出したいのです。ハーブと蔵王の山のイメージというのは、それ程ミスマッチでもないので、私達の頑張り次第では実現できる事だと思っています。とりあえず地元の小中学校にハーブの苗を無償で提供して花壇に植えて、地道な普及活動をしています。町の観光業にしてみても、特色を作るための手段としてのハーブというのは面白い素材だと思います。実際に地元のスキー場のお祭りで、ハーブ教室を開いた時はなかなか好評で、教室で紹介した苗はみんな一斉に買っていきました。

このように園芸店とは違った場所でハーブを紹介して、その人達の興味を園芸の方へ持っていければ面白いので、できる範囲でこういった活動もしていこうつもりです。

業界の方々へ

以上、私の会社がおこなっている事とやろうとしている事を書いて来ましたが、私の会社で何かお役に立てる事がありましたら是非連絡ください。ハーブに関する事と小ロットでのデリバリーの正確さには自信があります。具体的な仕事まで発展しなくとも、話をしてみると何かヒントになる事がお互いにあるかもしれないので、近くを通った時には寄ってみて下さい。



売り場のイメージ写真

新潟県における花卉園芸の歴史

新潟県立植物園

倉重祐二

十数年勤めた赤城自然園（群馬県勢多郡赤城村）を離れて、平成12年4月より新潟県立植物園に勤務することになりました。早いもので新潟での生活も今年で5年目を迎えました。

何をきっかけとして新潟県の花卉園芸史の調査をはじめたのか記憶が定かではありませんが、以前からその分野に興味は持っていたようです。そういえば10年ほど前にも、何に使うという目的もなく赤司広楽園など福岡県久留米市のクルメツツジ生産者のカタログを集めて、クルメツツジの品種名やその特徴、品種の作出年代、作出者などをまとめたことがありました。長らくこのようなことは忘れていましたが、新潟に赴任してから長尾草生園などの生産者の協力を仰いで、カタログをはじめとして写真やパンフレット、絵葉書、仕入帳など、何でもかまわず収集をはじめました。新潟県、特に新潟県立植物園の所在する新潟市は古い花卉産地であることは知っていましたが、これほど資料が残っているとは思いませんでした。

長い歴史を有するにもかかわらず、新潟県の花卉園芸の歴史をまとめたものはこれまでにありません。そのため、園芸史調査を植物園の業務のひとつとして位置づけて調査を進め、その結果をとりまとめて平成17年度から「新潟の花卉園芸史」の刊行を予定しています。

さて、現在でも新潟県はチューリップ、ボケ、アザレア、シャクナゲ、ボタンなど全国有数の生産量を誇り、また県内で育成された園芸品種が数多くあります。ここでは、これまでに収集した資料をもととして、江戸から明治の新潟県における花卉園芸史を概説しようと思います。

江戸時代

江戸や大阪などの大都市圏で大いに発展した江戸時代の園芸文化が、新潟県にも移入されたことはあまり知られていません。

長岡藩士であった丸山元純は、医学を修めるために

上京し、帰郷後に寺泊に居を構えました。彼の著した「越後名寄」（宝暦六年1756）は、越後を中心として各地を遍歴して集めた見聞のほか、故実の考証、さらに歴史、自然現象、民俗、社会、地理、本草などが事項ごとにまとめられた当時の百科事典です。

この中に、新潟で栽培されていた園芸植物についての記述があります。花草類には、「牡丹 山野には生えず、上方辺より根こし来る。苑に植て賞愛す。牡丹の接木する事近世之を初。」「芍薬 弥彦山などにある。苑に植る。艶麗なる者は方々より将来し、其数之を知るべからず。」「菊 近世、好花数品、甚多し。花園に植、樹盆に栽て遊ぶ。」などの他、撫子、燕子花、花菖蒲、向日葵、薔薇などが取り上げられています。

しかしながら、これらの園芸植物が県内で独自に改良されることも、また栽培が明治時代まで続くこともなかったようです。

新潟は米作農家が多数でしたが、江戸時代末期になると、禁止されていた副業が逆に奨励されたようです。この様子が「両組産業開物之巻」（慶応二年1866）に見ることができます。編著者である小泉蒼軒は、幕末期の地理学者として知られる市之瀬新田（現新潟市）の名主で、本書には新潟九カ村及び小須戸三十カ町村の立地条件や産物、農家戸数と、そのうち余業に携る者の名前、業種が記されています。

ここには、農隙余業品目として、苗木仕立、植木師、薬草薬木仕立芍薬茴香、草花商が上げられ、現在でも花卉生産の盛んな地域である新潟市出戸は「諸木苗木仕立方便利に相聞候に付、杉・からたちを始、其外必用に可相成果木之苗。草花等も取交、追々仕立方に取懸申候処、可也利潤も有之由、追々気込候勢に相見申候」、四興野・蕨曾根は「居屋敷畑へ芍薬茴香等之薬草植立」、また浦興野は「草花作り（五名）」と記されています。このように江戸末期には、新潟・小須戸地域で明治以降に続く花卉園芸産地としての基盤ができつつあったようです。

明治時代

大政奉還が布告され江戸時代が終わり、時代が明治とかわると他の欧米の文物と同じく洋種花卉が輸入されはじめました。当初は外国人商人によって、日本に在留する外国人のために洋蘭や球根が輸入されたようですが、明治20年代末から植物の輸出入を手広く行っていた横浜植木株式会社などの国内種苗商によって日本人向けの輸入が本格化しました。

その後、明治36年頃から洋種花卉の栽培が流行しはじめ、高価であった西洋草花も縁日の植木屋や呼売の草花屋によって安価に販売されるようになりました。明治35年から40年頃までに今日見ることのできる洋種花卉の大半が導入されたと言われ、この中でニオイスマシ、アナモネ、チューリップ、ヒアシンス、ランタナ、スイートピー、シネリヤ、プリムラ、ダリアなどの草花や球根植物が人気を博しました。

さて、新潟県における明治時代の花卉生産（一部は趣味の栽培）の状況を「新潟県園芸要鑑」（新潟県農会 明治44年）に見ると、北蒲原郡佐々木村（現新潟市）の夏菊、古志郡山通村（現長岡市）の切花、中頸城郡高田町（現上越市）四の辻区瀬尾原始氏の菊芸、中蒲原郡石山村竹尾（現新潟市）の草花、西蒲原郡味方村の花弁、北蒲原郡濁川村（現新潟市）の近藤賢之助の朝顔、三島郡来迎寺村（現越路町）水島義郎氏の花弁、三島郡深才村大字大島（現長岡市）長谷川玄三郎氏の牡丹が上げられています。

これらのうち石山村竹尾や味方村では明治半ばからグラジオラス、カンナ、フクシヤ、ゼラニウム、チューリップなどの西洋花卉が生産されていたことが記されています。しかしながら、これらの産地での西洋花卉の生産は、大正から昭和にと時代が進むにしたがい衰退していきました。

理由は分かりませんが、発行時には盛んに花卉生産が行われていた小合村（現新潟市）についての記述が「新潟県園芸要鑑」には見られませんが、「越後の花」（新潟県花卉球根協会 昭和5年）及び「小合村園芸史」（日本牡丹協会 昭和30年）から、当時の小合村での花卉生産の状況を見てみましょう。

明治初期の小合村では、キンカン、ミカン、牡丹、芍薬、五葉松、ボケ等が小規模に生産されていたにすぎませんでしたが、明治中期から大正時代にかけて花卉生産は大きく発展しました。このきっかけをつくつ

た植物がボタン、ヤブコウジ、チューリップやアザレア、シャクナゲなどをはじめとする西洋花卉でした。

ボタン

小合村のボタン栽培は、万延年間（1860～1861年）にまで遡るとされています。明治初期に栽培されていたボタンは数品種を数えるに過ぎませんでしたが、明治20年、茨曾根村（現白根市）の関根省吾が、大阪府池田市や兵庫県宝塚市からボタンの優良品種二百数十種を導入しました。これらのボタンが小合村や小須戸町の生産者に分譲された結果、ボタン栽培が本格化したといわれています。大阪や兵庫は江戸時代から続くボタン生産の本場であり、明治時代に数多くの園芸品種がつけられました。

日本におけるボタンの増殖は、江戸時代よりボタンの台木にボタンの穂木を接ぐ方法で行われていたが、台木の生産に時間がかかったため、最も生産量の多かった農家でも1年に千本の接木を行うのがせいぜいでした。

しかし、明治35年頃に小合村の江川啓作と四柳徳次郎がボタンをシャクヤクの台木に接ぐことに成功しました。草本植物であるシャクヤクはボタンに比べて短時間で実生台木をつくることのできるため、小合村ではこれまでの数倍の苗木の生産が可能となったのです。また、明治末期から小合村長尾草生園の長尾次太郎（初代）や荻川村（現新潟市）の田中新左衛門によって、ボタンの新品種が発表されはじめました。明治41年には村内で作出された新品種を含めて112品種のボタンが生産されていた記録があり、このうち7品種は新潟市や小須戸町の生産者や趣味家が作出したものです。この時代に確立した繁殖技術と新品種の開発が、新潟県のボタンの大産地化に大きく貢献したのです。



「Paeonia Moutan A collection of 50 choice varieties」

横浜植木株式会社発行（大正4年）に掲載された田中新左衛門作出の新潟ボタン「御所桜」

ヤブコウジ

江戸時代後期、紫金牛（ヤブコウジ）は葉に斑の入る変りものが江戸の好事家の間で流行しましたが、明治20年頃から小合村を中心に流行が再燃しはじめました。27年には日清戦争に勝利したことで好景気が訪れるだろうとの予測からヤブコウジの売買が県内で過熱し、投機の対象として生産者や趣味家だけでなく一般市民も巻き込んでいきました。最も価格が高騰した明治29年のヤブコウジの価格は、米価から換算すると、一番の人気品種「日之司」の3年生以上の株が1,000万～1,300万円でした。中には1鉢2,000万円で購入されたことも記録されています。

この間に、他県にもブームは波及し、新潟県においても倒産者や家財を傾ける者も多くありました。当時の園芸雑誌に取り上げられたヤブコウジの記事には、「関西各地至る所愛培家を続出し迎いて中国四国九州の辺僻に及ぼせり...」、「紫金牛の流行に就て一言す流行物即ち人気物は非常の盛衰を来すは必ず衰うの理にして...」（日本園芸会雑誌 明治28年）「種類は百種に至る（中略）明治二十五年頃より越後地方に流行し終に全国に及へり七福神、干綱、日の司の類は展芽一鉢数百円の売買在り...」（日本園芸会雑誌 明治33年）など、流行の大きさや売買への警告の内容が見えます。このような事態を憂慮した新潟県は、明治29年に「ヤブコウジの売買に狂奔するために、農家は田畑を荒し、実業家は商売を省みないので注意すべし」との内容の知事諭告を発しました。しかし、一向に取引は止まなかったため、翌年には新潟県から「紫金牛売買取締規制」が公布されました。これによって売買は鑑札によって許可され、取引場所の指定や売買内容の届出が義務づけられました。しかし、これを不満とした有力者が県当局に自由売買の嘆願をした結果、1年後に「取締規則」は廃止されました。



紫金牛取締鑑札



明治41年、小合村でのヤブコウジ栽培の様子

この後も、ヤブコウジは人気品種の変遷を経ながらも盛んに売買が行われたようで、明治末期には小合村で100品種のヤブコウジが栽培されていた記録があります。このようなヤブコウジの狂乱を経験した花卉生産者は、植物が投機の対象になるほどの利益を生む可能性があるという意識を持ったと考えられます。

西洋花卉

新潟県における最初の通信販売カタログ「長尾草生園 営業目録 第壹號」（明治41年）には、ボタンやシャクヤク、百合、椿、槭樹、茶梅、躑躅、保内産霜降松、盆栽などと共に、梨、桃、リンゴ、柿、実成梅、李杏、桑、西洋梨などの果樹や、薔薇、チュリブ、アネモネ、クロッカス、ヒアシンズ、グラジヲラス、カンナ、ゼレニウム、サボテンなどの西洋花卉が掲載されています。

小合村では明治末から大正はじめに移入されたチュールリップやアザレア、西洋シャクナゲなどの生産が本格化し、日本を代表する花卉産地へと変貌を遂げていきました。特にチュールリップは、比較的気温が低く晴天が多い春から夏までの新潟の気候が球根を充実させるのに適していたため、大正時代に小合村で日本初の商業生産がはじまり、ヤブコウジにかわる高い利益を生む花卉として、県内に栽培が広がっていったのです。

このように新潟県の明治における花卉園芸時代は、1)西洋草花・球根の移入により、新潟県の花卉園芸産業の基礎が形成され、都市近郊で発展しはじめた、2)新潟で古くから栽培されたシャクヤク・ボタンも、技術革新や品種改良により新潟を代表する花卉となる条件が整った、3)ヤブコウジの流行により、「花はもうかる」という意識が定着した、とまとめることができると思います。

吉田千秋とチューリップ 定説よりも早まった新潟県での商業栽培

最後に園芸史調査での最近の成果について、拙著の宣伝も兼ねて少々述べたいと思います。

琵琶湖周航の歌の原曲「ひつじぐさ」の訳詞作曲者として知られる吉田千秋は、歴史地理学の泰斗、大日本地名辞書を著した吉田東伍博士の次男として、現在の新津市に生まれ、大正8年2月24歳で夭逝しました。吉田千秋が中心となって兄弟や友人とつくっていたAKEBONOという回覧誌を調査する機会があり、この中に新潟県のチューリップ生産に関する重要な情報が含まれていることが分かりました。

新潟県でのチューリップ栽培は明治37年頃に来迎寺村（現越路町）の水島義郎によってはじめて成功しましたが、これは趣味で行なわれたものでした。定説では、その後大正7年に小合村の小田喜平太が同村へ最初に導入し、翌8年に数万球を輸入して、日本ではじめての商業生産がはじまったとされています。

しかしながら、先述したAKEBONOに掲載されていた日々の園芸作業を綴った「園芸日誌」には、大正5年から7年の間に小合村と小須戸町の花生産者から、70品種ものチューリップを購入したことが記録されていました。このことから、定説よりも早い大正5年には小合村や小須戸町でチューリップの商業生産が行われていたことは明らかです。大正6年5月の記録には「至る所の花戸（かこ）、ハイアシンス、早咲のテウリップ、アネモネなど盛りなり」とあり、ある程度の栽培規模だったとも考えられます。

明治41年に発行された「長尾草生園 営業目録 第壹號



「長尾草生園 営業目録 第壹號」

明治41年に発行された新潟ではじめての通信販売カタログ



AKEBONO 15号（大正6年5月）に描かれた吉田千秋が自宅で栽培したチューリップ5品種

號」にはチューリップが掲載されていることから、小合村にチューリップが導入されたのはこれ以前だったと思われます。

以上から、大正8年の小田喜平太による商業生産は「小合村には明治41年以前にチューリップが移入され、明治末期から大正初期に日本初の商業生産がはじめられた。その後大正8年に小田喜平太が大規模なチューリップの球根生産を開始した。」とするのが良いと思います。チューリップの商業生産の時期については、千秋の「園芸日誌」の内容を傍証する数々の資料も発見されています。

「吉田千秋研究 吉田千秋と植物」のご案内

吉田千秋の残した植物や園芸に関する資料をまとめ「吉田千秋研究 吉田千秋と植物」を吉田文庫から出版しました。吉田千秋の植物に対する興味と知識、また明治から大正にかけての花卉園芸の流行や小合村の花生産について検証したものです。市販されておりませんので、ご希望の方は吉田文庫までお問い合わせください。頒価は800円で、別途送料がかかります。詳しくは吉田文庫 〒956-0004 新潟県新津市大鹿624 電話・ファックス 0250-23-7070 までお問い合わせください。

住宅産業に花を

ミサワホーム株式会社

磯谷悦久

私は今ハウスメーカーのエクステリア担当者として年間約80棟前後の住宅建設に携わり、施主であるお客様と接しながら、植物と関わっています。花の世界の第一線でご活躍されている皆様にとって、私のような住宅産業に勤めるものの話がどれほどお役に立てるかわかりませんが、これまでの経緯経験を綴ろうと思います。

大学を卒業し、住宅産業に就職して早くも13年が過ぎてしまいました。この間、住宅会社の中で直接あるいは間接的に、「花」や「樹木」と関わりながら過ごしてきました。各地の分譲住宅地、マンション、ゴルフ場、老人ホーム、そして現在は個人住宅を中心にエクステリアという仕事していますが、そもそもなぜ住宅業界を選んだのかというところから書き進めたいと思います。

就職の前年、花卉園芸学研究室に在籍していた大学4年の夏、大阪で花の万博が開催され、私は友人と二人で見学に行きました。2日間でしたが、多種多様の催物や企画展、見本園等を駆け足で見まわったのを記憶しています。

その中で印象に残っているものの一つが、場内の総合案内所として建てられていた某ハウスメーカーの「住宅」でした。住宅の屋根に太陽電池を載せて、太陽の向きに合わせて地面ごと回転していたのは別としても、キッチンの一部にハーブやミニトマトを収穫できる水耕栽培のシステムを組み込んでいたり、壁の中や床の一部をガラス張りにして、やはり水耕栽培のシステムを入れてしまっていたり……。

私の卒業論文のテーマとして、人工環境下での植物の生長を追いかけていたので、自分の研究の一部が現

実になっているような気がして非常にインパクトのあるものでした。結局このときの印象からこのハウスメーカーに就職する事になりました。

残念ながら現在は、自社他社ともあの時のようなシステムは見受けられませんが、ここ数年、環境重視の世情から屋上緑化が盛んに取り上げられ、ハウスメーカーもモデルハウスに競うように施工したり、テレビを始め各メディアにも自社のイメージアップを図る重要な要素として、屋上緑化を利用しているのを目にされていると思います。屋上緑化の事は後でもう少しふれることにして、まずはハウスメーカーにとって一般的な、エクステリア・外構造園と植物について述べようと思います。

庭をテーマとした住宅

住宅展示場や分譲住宅地、マンションなどのモデルルームは外観の第一印象に特に気を使い、基本的に樹木・灌木・草花を多く取り入れるよう計画されています。私の会社でも、昔から植栽を効果的に使うように気を配っている会社の一つだと思います。

建物のイメージを損なわぬよう、慎重に樹種・樹形を選んで植え込みます。定期的に管理をし、季節によって草花を入れ替えます。ただ草花については最近のガーデニングの流行や管理コストも考慮し、宿根草が中心になっています。



庭をテーマにした住宅



緑豊かなモデルハウス

よく使われる植物

- 高中木： ヤマボウシ、ハナミズキ、シャラノキ、
 ヒメシャラ、エゴノキ、シラカシ、ソヨゴ、
 キンモクセイ、シマトネリコ、オリーブ
 低灌木： ツツジ類、アセビ、ジンチョウゲ、ナンテン、
 ビヨウヤナギ（ヒペリカム）、ヤマブキ、
 ユキヤナギ、レンギョウ、アジサイ、
 コニファー類、ローズマリー
 生 垣： レッドロビン、ヒイラギモクセイ、イヌツゲ、
 トキワマンサク
 草花、宿根草： バーベナ、ランタナ、ラベンダー、
 フックソウ、ヤブラン、タマリユウ、
 ギボウシ、ヘメロカリス
 つる植物： ヘデラ、ハゴロモジャスミン、
 カロライナジャスミン、スイカズラ

です。イメージはともかく、予算が問題となります。
 都市部と郊外の違いや、地域性も大きく影響すると思
 いますが、多くの場合は、外構、特に造園に対する予
 算は住宅計画の中で最も後回しになりがちな部分で
 す。地域性という面では、住宅の計画に際して関東よ
 り関西の方が外構を重視し、予算をしっかりと確保する
 傾向にあると聞いています。

実際の計画は、まず門や塀、アプローチ、駐車場を
 確保し、イメージに合わせ素材を選択し、予算をつけ
 ます（もうこの時点で都心部では植込みを作れない事
 も多々あります）。その計画の中で、いかに植栽の出
 来る地面を多く残るようにデザインするかが、私にと
 って一つのテーマであり特徴になっていると思いま
 す。そしてその限られたスペースに、前述のような樹
 木・草花を中心にした植栽計画を提案して行きます。

まず主木・高中木の予算を、次に低木・灌木で、最

一般住宅の外構造園の課題

次に、現在私の日常業務である
 一般住宅のエクステリア・外構造
 園についてお話しします。ハウスメ
 ーカーにとっては「花」との付き
 合いは非常に厳しいものといわざ
 るを得ません。

ハウスメーカーの中でエクステ
 リアを担当する私達の仕事は、住
 宅やアパートなどを建てていただ
 くお客様の敷地に対し、希望のイ
 メージと予算に合わせて外構造園
 計画を提案し施工するというもの



植栽を中心とした一般的な分譲住宅のアプローチ

後に予算がとれれば草花も.....というのが実情です。ある程度のご提案をして、予算に合わない場合は、後で自分達で植え付けていただくことになり、ホームセンターが繁盛することにもなっています。

どのハウスメーカーも、建築工事のうち、エクステリア工事を受注できるのはせいぜい7割くらいではないでしょうか。私の場合、そのうちに多少なりとも植栽工事が含まれるのは4割くらいで、造園工事と呼べるものは1割くらいだと思います。しかし、お客様は入居後必ず何らかの植物を購入しています。

私としては、基本的にこれで良いと考えています。庭は自分で作り、育てていくものだと思うからです。私達はその入り口で、個人では出来ない部分をちょっと手助けしているだけなのです。と言えば聞こえは良いのですが、実は業者にとって草花は非常にお薦めしづらいのです。

お客様とエクステリアの打合せを始めて植栽の話になると、手入れの楽なもの、虫のつかないもの、葉の落ちないもの、高くなならないものという要望が必ずと言ってよいほど出てきます。特に若い世代のお客様で、土の部分はいらぬという希望をする方も結構いらっしゃいます(虫の問題でツバキやサザンカ、クチナシ、一部のツゲなどは特別の希望が無い限り、計画には入れません)。

また、草花まですべて任せると別の問題が出てきます。それは、一般的に植栽工事を請負うと、一年間は植物の枯れ補償を負うこととなります。補償する植栽の範囲は会社によって多少違いがあると思いますが、芝生と草花(一年草)を除くのが一般的ではないでしょうか。宿根草は補償に含まれるため、その種類の選定は慎重にならざるを得ません。新しい品種や珍しい植物、土質を選ぶもの、病害虫にかかりやすいも

のは敬遠しがちです。結果的に放っておいて大丈夫なもの、経験的に丈夫な植物ばかりを使ってしまう。

また、建物は季節を問わず完成していくため、入居時期と植物の流通時期、植付け適期が一致しなければアドバイスに終わる事もしばしばです。本来なら、お客様ごとに手の届く範囲を考慮し、進んでご提案したいところなのですが、個々の植物の管理をアフターフォローできる体制にはとても及ばないため、あまり積極的に紹介できないのが実情です。顧客の満足度を第一にとらえて企業活動をしている中では、薦めっぱなし、売りっぱなしに出来ないところが問題です。

数年前イングリッシュガーデンがブームとなりはじめた頃、お客様から雑誌を提示され「こんな庭にしたい」とよく言われました。そして喜んでプランを作り施工をしましたが、当時はまだ日本の気候にあった植物ばかりではなく、また、お客様の管理能力も把握せずに施工してしまったため、大変痛い思いをしたことを思い出します。

屋上とバルコニーのガーデニング

最初に取り上げたように、近年オフィスビルや商業施設だけでなく一般の住宅でも屋上緑化やバルコニーガーデンが盛んに取り上げられるようになってきました。行政も緑化基準の中に組み入れたり、一般の住宅に助成金を出したりする自治体も少なくありません。

私の所属する会社も屋上やバルコニーを緑化することによる住宅のエネルギー消費の効率化や、都市のヒートアイランド現象減効果に着目して、本格的に楽しめる個人住宅向けのバルコニー用ガーデンキットを共同開発しました。

これは、宿根草入りのプランター、専用の培養土、特別に育成したマット芝と、石や木製のマット、灌水キットを組み合わせたシステムガーデンです。特に宿根草はイギリス出身の園芸家に参加していただき、4つのイメージパターン(ホワイトガーデン、オールシーズンガーデン、ブルー&イエローガーデン、ホットガーデン)を決めて品種を選定しました。イギリスから苗を輸入、国内で育苗し、パターンに合わせて出荷するというハウスメーカーにあるまじき本格的なもので、97年度グッドデザイン商品の金賞というおまけまでいただけてしまいました。

ただ、自社のお客様を中心に販売しており、外部の方にはごく限られたルートでの販売だったので、あ



植物となじんだ門廻り



屋上とバルコニーのガーデニング例



まり一般的には知られていないと思います。というのも一般の住宅にとって屋上やバルコニーへの緑化は建物に対する負荷が非常に大きく、また法規上の問題などもあり、手放しでお薦めできないのです。弊社でも専用の設計強度の規格を設け、その割高な建築コストを認めていただけた場合に実現できるというものでした。数年間販売をしていましたが、特に宿根草や芝生の育成や管理コストを吸収しきれず、残念ながら現在は一部床材やプランター、ファニチャー類を残して、休眠中となっています。

選定した宿根草

アガパンサス、アルケミラ、ベジニア2種、カラミンサ、ケロネ、コレオプシス2種、クロコスミア、エキノプス、ユーフォルビア、ゴーラ、ゼラニウム5種、ヘレボラス、ヘメロカリス、ホスタ2種、ナイフォフィア、リアトリス、マルヴァ、モナルダ、ネベタ、ペロプスキア、ファイシスティジア、ポリゴナム、サングイソーバ、サリクトラム、ヴィオラ、リシマキア、アカンサス

住宅に花を

私達がお客様に植物を気軽にお薦めしたり、家の周りをコンクリートで固めてしまわないようにするためにはどうしたら良いのでしょうか。新しい生活を始めようとしている方々と接していて、もともと植物が嫌いな方はまずいません。

植物を育てたい人が躊躇する理由は、日常の手間の問題もありますが、虫や病気の時の対処がわからないとか、枯らすのが嫌だというものに他ありません。

以前お客様に病害虫の情報をインターネットで調べることをお薦めしたのですが、初心者は何百というサイトの中から、どこを見たら良いのかわからないようです。情報が多すぎてかえって迷ってしまうともいえるでしょうか。このような初心者のアフターフォローさえ出来れば、ブームといわれるガーデニングの裾野はまだまだ広がるのではないかと思います。

学生時代に花卉を学び、住宅産業に身を置く者として、やはり人々の生活に潤いを与え、住環境を豊かにする草花や樹木が非常に重要なアイテムであることは認識しながらも、なかなか皆様に薦めきれない現実と自分の知識の少なさを痛感しております。

切花生産者をめざして

～ 新規就農の挑戦 ～

村 田 一 政

新規就農を思い立つ

私の実家は山口県の下関市に近い豊浦郡豊田町で稲作の兼業農家をしています。面積は3haで小学生の頃から田植えや防除、稲刈りと毎年手伝いをしていました。しかし、この規模面積では専業農家としてやっていけず父も兼業で、平日は会社で働いていました。そうすると、平日は常に管理ができる状態ではないので、水管理や防除などに手が回らないように思えました。

私は、地元の普通高校を卒業後、漠然と花関係の仕事がしたいと思っておりました。ちょうど高校の卒業名簿の中に千葉大学園芸別科に進んだ先輩がいたことで、漠然と進学を決めました。今考えると相当甘く考えていたなということが痛いほどよくわかりました。

園芸別科花卉専攻入学前までまったく花のことを知らず、両親がやっているわけでも、趣味で園芸をやっていたわけでもないのに、1年目の実習はとて苦勞しました。なぜその作業をしているのかほとんど内容もわからないまま実習をしていました。

2年目になって、ある程度植物のことがわかるようになりました。研究課題では、切花としても人気があり、花色も豊富なトルコギキョウを選び、鉢物としてバランスのよい良質なものを生産するための条件を

討しました。最適な用土条件や肥料の計算などを調べて調整しましたが、実際に栽培してみると水はけが悪かったり、ヨトウムシに食害されたりして、考えていた鉢物はまったく生産できませんでした。改めて自身自身の考えに甘さがあることを痛感しました。

しかし、この失敗が逆に花づくりをしたいと思うきっかけとなり、この頃から、花卉生産者になりたいと強く思うようになりました。

研修生となる

園芸別科を修了してからは実家に戻り、近隣でカスミソウやユリを生産している花卉生産者の所で1年間研修をすることにしました。ここでは、生産技術を専門的に習うだけではなく、苗や球根の定植やピンチの方法、薬散の方法、出荷方法など、切花生産に必要な作業の流れを理解することができました。特に定植時に根を傷めないようにと厳しくいわれました。普通に考えれば、常識なことですが、素人の私にとってはすべてが初めてで貴重な経験でした。

研修期間が終わる頃には、菊の露地栽培を任せてもらいました。自分ひとりで畝立てからマルチ張り、定植、ピンチ、本数選定を行いました。また、暑い時期に定植したので、葉焼けしないように葉水をかけたり



切花パイプハウス全景



トルコギキョウ収穫



トルコギキョウ出荷調整

して細心の注意をはらいました。この菊の栽培で、自分で考えて行動することの大変さや、灌水のタイミングや葉散のタイミングなどを見極める難しさなどを実感しました。結局最後は、早霜によって半分くらい花を傷めてしまい、あまり収穫はできなかったものの、サビ病や害虫に食害されることもなかったのも、このことは大きな自信になりました。

就農の準備を始める

研修を開始したのと同時に、就農に向けて準備を始め、普及所と相談して就農円滑化資金を活用することにしました。普及所からは地元の特産品であるイチゴのハウス栽培を強く勧められましたが、私は花に比べイチゴの単作では変化が乏しいこと、生産組合に入ること自分自身の目標が見えなくなってしまうのではないかと思い、断りました。

この就農円滑化資金制度は、半額は県と町からの補助金で半額は農協のリースという制度です。この制度から1,000万円の融資を資金としてパイプハウスの部材、冷蔵庫、暖房機、畝立て機などを購入しました。パイプハウスは単棟で1棟50坪にしました。連棟よりは単棟の方が少人数で建てやすく、ハウスごとに栽培品目を変えられると考えました。ハウスは全部で6棟、合計300坪にして部材を購入しました。人件費をかけないために自分でハウスを建てることにしました。何事も経験ですから。学生のときに何回か実習で建てたりビニールを張ったりしていたので、その時の作業が結構役に立ちました。

生産を開始する

私が1年目に栽培した品目は、トルコギキョウ、ソ



カーネーション生産

ネット系カーネーション、輪菊、小菊、アイリス、ストック、ペニバナです。大学で栽培（失敗？）した経験を生かしてトルコギキョウを主要品目としました（リベンジの意味も含めて）。カーネーション、キク、アイリスは市場に出荷する地元の生産者が少ないことから、生産することにしました。作型として夏期はトルコギキョウ、小菊、冬期は輪菊、小菊、アイリス、ストック、ペニバナとし、周年でカーネーションも作りました。私の地元は気温が下関よりもやや冷涼なことを利用して、夏期出荷を中心とした作型にしようと考えました。

夏出し（盆用）のトルコギキョウは、私が予想したとおり地元の市場で花が少なくなってから出荷することができ、ボリュームのあるトルコギキョウが収穫できたので単価も良かったようです。初めて現金収入を得たときは、いいようのない嬉しさを感じました。

カーネーション、輪菊、小菊は収穫率が悪く、本数が採れません。5月、6月に雨の日が多く、根腐れや白サビ病が発生したのが原因でした。周囲が山に囲まれているので、風通しが良くないのも原因と思いました。そこで2年目は排水性を良くするために高畝にしたり、通気性を良くするために下葉を取ったりしました。

アイリス、ストック、ペニバナは無加温である程度の省力生産が可能ではないかと考えて栽培することにしました。予想通りある程度の収穫を得ることができました。

2年目の生産

1年目のトルコギキョウの切花の成績がよかったので、2年目の今年はハウスを去年より1棟増やして3

棟にしました。今年収穫した分のトルコギキョウの2度切りにも挑戦しようと思っているので、合計で4棟分栽培しています。

しかし、今年の天候は去年の冷夏とは違い、猛暑で私の町でも平均気温が2.4 高くなりました。この高温のためトルコギキョウも菊も開花が前進してしまい、彼岸に出荷しようとしていた花は8月上旬には一番花が咲いてしまい、草丈もポリariumもなく、茎が細く、曲がり非常多くなってしまいました。やはり、天気だけではどうすることもできず、しかも猛暑になるとは全然考えてもいませんでした。去年は良いトルコギキョウが出荷できたとはいえ、やや無理をしたと反省しています。

来年は今年より早めの、5月から定植していきたいと考えています。まずはきちんとした作型を自分で確立してから、いろいろな作型に挑戦してみようと思いました。

現在の出荷方法

現在は、9割以上が下関合同花市場に出荷。残りは地元のふるさとセンターなどに出荷しています。今まで地元で切花を生産する人がいなかったせいか、ふるさとセンターではなかなか売れないのが現状です。そのため、市場出荷が中心になっています。

切花は月水金の週3回の開市ですので、トルコギキョウや菊、アイリスは週3回、カーネーションは月金の週2回出荷しています。市場に出荷しに行ったとき



ストック収穫

には、他の生産者がどんな品種や品質の花を出荷しているのか、他県から送られてくる花の品質を必ず見るようにしています。切り前や品質がわかるので非常に参考になります。夏期には熊本や北海道から、冬には沖縄から送られてきますが、どれも茎が太くてしっかりしており、花も大きく輪数も多いので、自分が生産した花がそのような切花に少しでも近づけるように努力していきたいと思います。

最近では、自分の花を買って下さった小売店を訪問し、自分の生産した切花についての品質などの情報交換をするようにもしています。小売店やお客様の声を大切にしたい生産をして行きたいと考えたからです。また、トルコギキョウの品種やカーネーションの品種、人気のある品種などを聞き、今後の生産の参考にして行こうと考えています。

また、フラワーアレンジメントの教室にも通い始めました。アレンジメントや花束を作ることで、花の流行や色使いなども勉強できると思ったからです。今の流行などは種苗会社のカタログではわかりづらいところがあるので、これからも品種などは小売店やアレンジメント教室などで情報を集めたいと思います。

今後の方針

まったくの素人から生産を始めて1年が経過しました。今では自分の花を買っていただける喜びを感じ、より良いものを生産しようと考えることがとても楽しく感じる毎日です。しかし、今までは作っているというよりも、できているというのが正直なところです。これからは、出荷が前進したり遅れたりすることなく、毎年同じ時期にある程度正確に出荷できるようにしていきたいと思います。

また、今までは作付けの品目は自分で決めただけで、ただ漠然と作っていたのですが、地元の出荷量が少ない夏期に良い花を生産して出荷したいと考えています。今まで多くの方にお話を伺い、援助していただいたことによって何もわからなかった学生時代に比べたら少しは成長できたような気がします。これからは、小売店さんやお客様が買いたくなるような、より良い花を生産できるように日々努力して行きたいと思います。

もう安売りはご免だ！ 進む花の産業革命をつかまえる

㈱サカタのタネ 西日本支店 久保田 芳久

第21回2004年の花葉サマーセミナーは7月24日(土)~25日(日)に、場所は東京都千代田区富士見の日本歯科大学 本館8階 富士見ホールで開かれました。会場は中央線・地下鉄飯田橋駅のそばで、全国からの集いに地の利がよい所です。昨年から使わせていただき、今回が2回目。事務局・幹事や関係者も都合が判り、設定・準備も少しは早くなったと感じます。

エレベーターを降りた会場の入口前のスペースが広く、ここを書籍・カタログ売り場、そして花の展示室としました。今年の7月は早くから異常に暑く、出展する花を揃えるのに苦労したメーカーさんが多かったようです。鉢物・ポット苗を中心に、切花も壁面を飾り、農家や普及所の担当者等がじっくり観察をしていました。

今回のテーマはちょっとショッキングな言葉を使いました。これはここ数年続いている花関連の安値と、安値に苦しむ生産・流通の事情があるからです。長い不景気は花の相場にも深い影を落とし、産地の悲鳴が聞こえ、市場も厳しい状況にあります。当然種苗業も例外ではありません。アメリカも長いこと安値に邁進していましたが、ブランド化により安値からの脱出を成功させている例があります。また日本でもたくましく頑張っている人々が居ります。この情勢だからある個人育種の意義、市場からの試み、消費者のニーズを徹底的に研究した売店などを取り上げ、苦境からの脱出を訴えました。

今回の参加者は、常連の農家は「元気をもらいに来た」といったところですが、普及所など公務員の方々が多かった事が特徴です。参加者は多く、242名と、会場運営の幹事・学生多数、それにプレス関係者等合わせて341名と、にぎやかに催されました。

安藤会長から開会の挨拶があり、テーマの定義付け、今回の企画の意味が説明され、講演へと入りました。

7月24日(土)

「安売りに対抗するアメリカの選択」

ジョージボール社 出版部

フローラルカルチャー・インターナショナル

主幹編集長 Dabbie Hamric 氏

通訳：千葉大学花卉園芸学研究室助手 国分尚氏



デビー・ハムリック女史は、今回の講演をするにあたり、3日間ほど早く来日され、長岡幹事長等の案内で日本の市場、園芸店、ホームセンター等を調査・視察されました。女史は以前にも数回来日していますが、今回また新たに発見するものがあったそうです。そのことは今回の講演内容に生かされました。

女史はジョージボール社の出版部に所属しているジャーナリストですが、公平で客観的な内容の構成をし、アメリカの様子を詳しく話してくれました。

アメリカ花苗流通の現状と背景を話した後、花苗のブランドとは、という重要な定義付けを行いました。アメリカではガーデンセンターにブランドを見出しており、商品にブランドが無いと。ブランドは「もの」ではなく「体験」と言い切ります。植物の使用感がブランドであるという、我々に新鮮な投げかけでした。勿論そこにパッケージ等の工夫とグッズは必要です。

この上でメインテーマの有名3ブランド、Proven Winners (PW), Simply Beautiful, Flower Fields の内容が詳しく語られました。グローアは提携して苗を買い、それぞれのラベル、ポスター、鉢を使って出荷します。テレビや雑誌を用いて広告しており、花のタレントと契約している所もあります。

他のブランド企画も触れましたが、ブランド失敗例が語られ、参考になりました。

何れの販促プログラムも悩みは小売店での品質コントロールが出来ていないことです。我々が驚いたのは、店の商品の並び替えや差し替え、水やりは生産農家が行い、店はしないというのです。女史が日本で園芸店やホームセンターの従業員が世話をしている姿を見て、アメリカとの違いを感じたといえます。

「この閉塞感を打開できるのは育種家しかない」

有限会社フローラルトゥエンティワン

代表取締役 坂寄 潮氏



氏はサントリーのサフィニアの育種で知られ、タバアン、ミリオンベルなど育種家としてヒット商品を出し続けました。1997年に独立し、(有)フローラルトゥエンティワンを創設。個人育種家として、PWグループで多くの品種を世に送り出しています。

供給側と消費側の質と力関係の変化、大型種苗会社育種の盲点、鉢の苗の価値とは何かを説いたあと、本題に入りました。野生のペチュニアとの出会い、交配して出来たものへの驚き。この時から、坂寄氏の育種活動が本格化したそうです。常に消費者・需要を見つめつつ、野生種に戻る姿勢はバーベナでも花開きました。この閉塞感を打破するのは自由な発想の育種でしょう。

「どうして私たちは市場出荷ができないか」

講演 (有)三浦園芸社長 三浦基彰氏



この講演はそれ以前に行われた討論会を三浦氏が代表して発表する形をとりました。



講演者の三浦氏とともに質問に答える篠原氏、角田氏

討論者 篠原 茂氏 (有)ハルディン篠原社長
角田ミサ子氏 (有)角田ナーセリー専務
三浦基彰氏 (有)三浦園芸社長
司 会 安藤敏夫 千葉大学教授
記 録 神谷卓男氏 (有)K I S
大前良夫氏 (有)権行社

三浦氏からその討論の状況と、内容の説明がありました。また自分の作るハイドロカルチャーと、店先の陳列の様子が画像で紹介されました。

この討論に参加された三氏はかつて市場出荷を行っていましたが、現在ほとんど無くなり、独自の市場外流通ルートを開いています。変動相場では大きくなった所帯が支えにくく、安定を求めたこと。または客に誘われて自然体などが理由です。その分末端の売り場まで含めた研究が良くなされており、作って市場に出す生産者とは一線を隔しています。

流通も、集めるための車手配をする市場と異なり、店に届けるためのデリバリーに勤めます。営業における展示会の比重は何れも高く、またその表現が次の勉強になっているようです。

講演後の質問は、言いたくないノウハウの部分に及び、夏の「コリウス」や、「切花畑」や「足元注意」など、企画の力がいかに大きいかが表明されました。

「市場はこうして構造疲労を乗り越える」

(株)フラワーオークションジャパン

取締役営業本部企画開発室長 長岡 求氏

この一つ前の市場外流通を受けての、市場側の講演となりました。前の市場外流通の安藤教授の一言、「市場の出来ないことをしてきたのですね」を返して、「市場のやらないことをしてきたのです」と。市場を変革する意思表示と聞こえました。

坂寄氏の功績を称えつつも「サフィニア公害」を説



きます。メーカーブランド品が高値で売り場の多くを占め、市場の苗が片隅に追いやられていると。「誰が売り場をおかしくした。素人化が仕入れと市場で進んだ」「セリ的前提条件、情報共有化が崩れた」など手厳しい分析が示されました。

構造疲労の処方箋が小売編、市場編で示されました。「提案型の売り場作り」「市場は黒子から主役へ」「理想的なブランディング」「卸売市場法の改正」など、その輪郭が示されました。秘策は別にありそうでした。

7月25日(日)

「JA東海グリーンのありがとう 感謝される売り場作り」

JA東海グリーン代表取締役社長 前田 悟氏



名古屋椿協会の会長も勤める前田氏は、様々な経歴を経て平成15年に(株)JA東海グリーン社長に就任され、71店舗を展開、売上高200億円を達成しています。

グリーンセンターの概要を多くの資料で紹介され、それに則った店舗の基本コンセプトを提示しました。そして実際の売り場や商品の企画は、徹底した「自分たちの地域のニーズ」研究でした。土壌、気候、生活習慣、行事、流行そして宗教まで検討されています。今後の目標は売上280億、「生産農家と一体となった販売企画営業」です。

前日一日間かけて投げかけた様々な問題に、直接もしくは間接的に触れた話で、「痒い所に手が届いた話」でした。

「押し寄せるグローバルスタンダードと日本の戦略」

千葉大学園芸学部教授 安藤敏夫氏

この2日間の多岐にわたる講演を受けての総括を、



会長の安藤教授が担当しました。

前日取り上げられた問題点を一気に列挙し、「花産業の玉突き現象」としてとらえました。「さまよえる日本の農家」をキーワードにそれらの背景に迫り、アメリカの視点を捉え、日本の選択に言及しました。それらは「生産者育種のすすめ」であり、「生産者連合を作ろう」です。そして前日からの話題の発展で、「市場と共栄しよう」「種苗会社と共栄しよう」と、より便利で前向きな方向を示しました。市場外流通や、JA東海の販売に学べば、需要は十分にあるのですから。花消費の原点に立ち返り、「花を召ませ」で結びました。

1日目、2日目の質疑応答は活発で、提出された多くの質問用紙に時間が足りないくらいでした。また、各種苗会社の品種紹介も手慣れて、単に品種だけでなく何を訴えたいかが盛り込まれるようになりました。

アンケートには質問項目以外に「ありがとうございました」と添え書きされたものが複数ありました。やってよかったセミナーでした。

後日、このセミナーテキストが関係官庁方面でも検討・研究されていると聞きます。

花葉会サマーセミナーが確実に情報の波紋を広げていることと確信します。



質疑応答に応える講師の方々

テキスト購入ご希望の方は、代金2,000円（送料込み）を添え、下記へお申し込みください。

〒271-8510 松戸市松戸648

千葉大学園芸学部花卉園芸学研究室「花葉会」事務局

TEL:047-308-8810 郵便振替：東京5-13341 花葉会

□ 花葉情報

花葉会総会

平成16年度の花葉会総会は、10月2日(土)午後2時より、東京・芝パークホテルにて開催されました。

出席者は55名、定刻どおりに始まり、宮田幹事の司会で進行されました。

最初に安藤会長より挨拶と「農場の真ん中に、本年6月、東洋医学の医院・柏の葉診療所が開所しました。開所したとたん予約が殺到し、現在予約待ち120名となっています。ここは、緑豊かな環境の中で、植物や園芸作業が人に及ぼす様々な影響や問題点を見いだす場で、植物のプロと人間のプロが共同研究を行う世界初の組織です」と、変革した千葉大学内の共同利用施設となった農場の現状報告がありました。

ついで、議長に長岡幹事長が指名され、議事に入りました。議題は、次のとおりです。

平成15年度事業報告

7月19・20日
第20回花葉サマーセミナー
9月27日 総会
花葉会賞の贈呈
15年度の実賞者は、
岩佐吉純氏(昭和26年園卒)
の1名であった。
10月28日～11月4日
第14回海外園芸事情調査
12月10日「花葉」22号発行
幹事会の開催は、平成15年4月26日、6月21日、7月20日、8月23日、9月27日、11月8日、平成16年1月31日、2月28日の8回。

平成15年度会計報告

収入の部
前年度繰越金 5,206,334

会報広告料(22号)	1,258,530
テキスト売上	50,500
書籍売上	33,785
卸用カタログ売上	61,000
協力金	488,470
雑収入	59,388
預金利息	26
合計	7,158,033円

支出の部

印刷費	195,720
会報関係	1,416,419
通信費	279,250
運送費	15,470
記念品代	36,750
会議費	522,493
事務費	253,986
賃金	367,920
慶弔費	5,082
税金	69,482
セミナー経費補填	1,756,084
雑費	105,050
合計	5,023,706円
差引残高	2,134,327円

2003年サマーセミナー会計報告

平成15年7月19・20日 日本歯科大学富士見ホールにて開催
参加者数255名(うち幹事、講師、記者、発表者、学生等101名)

収入	円
受講料	
@30,000 × 123名	3,690,000
@27,000 × 24	648,000
@18,000 × 7	126,000
合計	154名 4,464,000円

支出

会場費	2,633,503
印刷費	891,715
運送費	2,770

講師謝礼	800,000
講師旅費宿泊費	1,261,670
通信費	266,860
事務費	244,211
会議費	0
税金(預り金)	55,555
広告費	58,800
備品費	0
雑費	5,000
合計	6,220,084円
差引	1,756,084円

平成16年度事業計画案

「花葉」23号発行
花産業必修1000属検定
第21回2004年
花葉サマーセミナー開催
平成16年7月24・25日(土・日)
日本歯科大学富士見ホール
第15回海外園芸事情調査
花葉会賞の贈呈

平成16年度予算案

収入の部

前年度繰越	2,134,327
会報広告料	1,100,000
テキスト売上	50,000
その他の収入	400,000
預金利息	100
合計	3,684,427円

支出の部

印刷費	150,000
会報関係	1,500,000
通信費	150,000
新規事業計画費	600,000
運送費	20,000
記念品代	120,000
会議費	200,000
事務費	300,000
賃金	400,000
慶弔費	50,000

税金	70,000
雑費	54,427
予備費	70,000
合計	3,684,427円

基金報告

前年度残高	25,794,764
醸金	170,000
定期利息	6,060
預金利息	5
合計	25,970,829円

(平成16年3月31日現在)

新規事業計画費について

安藤会長からホームページの外部委託と維持費、1000属検定に関わる事業費が発生するので、会計のあり方を見直しながら事業を考えてゆくとの説明がありました。

新幹事推薦

安藤会長より、現在RHSJ(英国王立園芸協会日本支部)の職員である鈴木邦彦氏の推薦があり、拍手を持って承認されました。

その他

小杉清先生が5月17日に学部を訪れ、卒寿の記念として、戸定会

と花葉会にそれぞれ御寄付を賜りました。花葉会に頂きました寄付は醸金に入れさせていただきましたとの報告が、安藤会長よりありました。

なお、それぞれの議題は、拍手を持って承認され、最後に長岡議長より「ご協力ありがとうございました」との挨拶があり、無事総会が終了しました。

花葉会賞贈呈

総会終了後、花葉会賞の贈呈式がありました。鈴木司幹事より、花葉界に多大な貢献をされた、板倉信夫氏(昭29別了)、河野幹司氏(昭30園卒)、原幹博氏(昭37園卒)、高林成年氏(昭38園卒)の4名が紹介され、安藤会長より賞状と記念品が授与されました。

受賞者4名を代表して板倉信夫氏より、「本日は、名誉ある賞を頂きありがとうございました」との挨拶がありました。

閉会の辞は副幹事長の田中桃三。次いで記念講演が行われました。

記念講演

受賞者を代表して高林成年氏が「植物園人生を振り返って」と題し、氏の勤務先の京都植物園でコレクションした、園芸植物として利用価値のある熱帯植物や珍しい植物を、スライドを交えながら40分ほど講演してくださいました。

懇親会

午後4時より、階を移して懇親会が行われました。司会は小泉水・山下容子の両幹事、開会の挨拶は鶴島久男相談役。次に花葉会賞受賞者の原幹博氏から挨拶があり、花葉会賞受賞者の河野幹司氏が乾杯の音頭を取りました。途中、浜名湖花博の百華園にアメリカデイゴの絞り花を展示した長沢哲哉氏(昭34)が、「殖やして広めたい」との意向を話され、次いで真家氏が花葉界への提言をされました。

閉会の挨拶は武内副幹事長が行い、和やかな雰囲気では終了しました。(文責：編集部)

~~~~~  
お知らせ  
花葉会のホームページが  
新装オープンしました。  
<http://www.kayoukai.net/>



## 花葉会会則（2003/9/27）

### 名 称

第一条 この会は「花葉会」という。

### 事務局

第二条 この会の事務局を千葉大学園芸学部生物生産科学科花卉園芸学研究室におく

### 会 員

第三条 本会の会員は、千葉大学園芸学部花卉園芸学研究室並びに附属農場花卉部に在席した者、及び戸定会会員で現在花卉関連業務に携わる者、  
(2) 内地留学生、研究生、聴講生、その他本会の主旨に賛同し、総会の承認を得て所定の手続きを終えた者とする。

### 目 的

第四条 この会は会員相互の親睦、研さんと情報交換を図ると共に、花卉園芸界の発展に寄与することを目的とする。

### 事 業

第五条 この会は前条の目的を達成するため、次の事業を行う。  
総会 親睦会 研究会  
会報、名簿等の発行 功労者の表彰 その他、前条の目的を達成するために必要な事業。

### 役員等

第六条 この会に次の役員をおく。  
会長 1名 副会長 1名  
幹事長 1名 副幹事長 3名  
年次代表幹事 若干名  
幹事 50名以内 会計監査 2名  
(2) この会に名誉会長をおくことができる。  
(3) この会に顧問、相談役を若干名おくことができる。

### 役員等の選出と役員

第七条 会長は総会の総意により推戴し、会務を総括し、会を代表

する。

- (2) 副会長は総会の総意により推戴し、会長を補佐し、会務を処理する。
- (3) 幹事長は幹事の互選により選任し、幹事会を主催し、会を代表して会務を処理する。
- (4) 副幹事長は幹事の互選により選任し、幹事長を補佐し、会務を処理する。
- (5) 年次代表幹事は幹事の互選により選任し、世代の意見を集約し、会の運営に寄与する。
- (6) 幹事は会員の中から互選する。
- (7) 幹事は幹事会を組織し、議事を審議決定し、会の事業を執行する。
- (8) 会計監査は会員の推薦により会長が選任する。
- (9) 会計監査は会の会計を監査する。
- (10) 名誉会長は会員の中から総会において推戴する。
- (11) 顧問、相談役は会員の中から幹事会の協議を経て会長が委嘱する。

### 役員の任期

第八条 役員は任期は2年とし、再選を妨げない。

### 会 計

- 第九条 この会の経費は会費、寄付金、収益金をもってあてる。
- (2) 本会の収支予算及び決算は幹事会の議決と会長の承認により定められ、決算は会計監査の監査を受けなければならない
  - (3) 会計年度は毎年4月1日より翌年3月31日までとする。
  - (4) 会費は必要に応じ幹事会の議決と会長の承認により徴収する。

### 会 議

- 第十条 総会は年1回とし、会長が召集する。
- (2) 幹事会は必要に応じ、会長が召集し、会務事項について審議する。
  - (3) 総会の議事は出席会員の2/3以

上の賛成がなければ議決できない。

### 会則の変更

第十一条 この会則は総会の議決を得なければ変更できない。

### 附 則

この会則は、平成15年9月27日より施行する。

この会の細則については、幹事会にはかり、会長が決定する。

### 花葉会 役員（2004/10/2）

顧 問：小杉 清

相談役：岩井英明、岩佐吉純、  
魚躬詔一、植村猶行、  
小田善一郎、鶴島久男

会計監査：花岡喜重、林 角郎

名誉会長：横井政人

会 長：安藤敏夫

副会長：上田善弘

幹事長：長岡 求

副幹事長：田中桃三、望田明利、  
武内嘉一郎

年次代表幹事：田中桃三、  
井手みえこ、望田明利、  
武内嘉一郎、小笠原 誓、  
渡辺 均（年次順）

企画編集幹事：井手みえこ、  
小泉 力、鈴木 司、  
田旗裕也、寺本貴尚、  
羽毛田智明、宮田増美、  
村井千里、山口まり、  
山田幸子、遊川知久、  
渡辺 均

庶務会計幹事：上田善弘、  
小沢 勇、河合伸志、  
國分 尚、西原彩子、  
浜田 豊、福永哲也

事業基金募集幹事：秋山泰男、  
熱田 健、大林修一、  
小笠原 誓、小黒 晃、  
久保田芳久、齋藤俊一、  
荘 智裕、竹下大学、  
富山昌克、中川雅博、  
初山秀之、山下容子  
(五十音順)

新幹事：鈴木邦彦

## 花葉会賞受賞者紹介

### 園芸・造園を通じた人生 板倉信夫氏

横井政人

#### 板倉信夫氏の略歴

昭和6年9月4日 茨城県に生れる  
昭和24年3月 取手第一高等学校卒業  
昭和29年3月 千葉大学園芸学部園芸別科修了  
昭和30年4月 藤田興業株式会社(現藤田観光株式会社)  
箱根小涌園熱帯植物園主任  
昭和44年4月 藤田観光株式会社造園部  
昭和61年12月 有限会社東洋緑地代表  
平成5年4月 株式会社学園商事造園部長  
平成12年3月 退職  
平成12年4月 株式会社水庭農園技術顧問  
平成16年4月 日本造園修景協会茨城支部事務局  
・評議委員

氏は戦後の熱帯植物の栽培が少なく、まだ観葉植物がひじょうに貴重な時代に、箱根小涌園に勤務。箱根の温泉熱を利用した熱帯植物園の主任として長くその栽培、普及に努められ、熱帯観光園として魅力的な地位を築かれた。当時のペゴニア園は、私にも思い出深い。

さらに、造園修景、緑化事業にも力を入れ、全国リゾート施設造成、山岳地のレクリエーション計画、暮らしのある庭・家庭を創る小さな庭づくりなどに参加し、花や樹木を利用した環境美化の仕事に従事された。

また海外技術協力協会に参加し、イラク、中国の園芸・造園技術者教育にもあたられている。

最後の仕事として、茨城県の植物園熱帯植物館設立、つくば研究学園都市の緑化、緑地管理などに従事された。

氏は温厚で誠実な態度でこれらの事業の数々をみごとにこなされた。それらの業績は地味ではあるが、すばらしいものである。



花葉会賞を贈呈される板倉信夫氏

### 38年間中学理科教育につくされた 河野幹司・省子夫妻

岩佐吉純

#### 河野幹司氏略歴

昭和8年2月8日 東京・新宿にて生まれる  
昭和26年3月 埼玉県立浦和高等学校卒業  
昭和30年3月 千葉大学園芸学部卒業  
昭和30年4月 鳩ヶ谷市立鳩ヶ谷中学校赴任  
昭和42年4月 同校理科主任  
昭和53年4月 鳩ヶ谷市立里中学校に転任  
昭和54年10月 文部省派遣海外事情視察でアメリカに出張  
昭和57年4月 同校教頭  
昭和57年4月 埼玉県理科教育研究会常任理事  
昭和63年4月 鳩ヶ谷市立八幡木中学校校長で赴任  
平成3年4月 元の鳩ヶ谷市立鳩ヶ谷中学校校長で赴任  
教育委員会、生徒指導委員会委員長・青少年問題協議会委員・科学教育振興展覧会委員長・教育研修会会長・全国中学校理科教育研究会実行委員会副会長  
平成4年 鳩ヶ谷市交通安全対策推進協議会より交通安全功労者として表彰される  
平成5年3月 退職

この度、河野幹司君が花葉会賞を受賞される栄誉となった。昭和38年に1期下の深谷省子さんさんと結婚、一男一女の家庭を作ったが、お二人はともに中学校教諭として教育に捧げた人生を歩まれた。花葉会の総会にもいつも二人で出席、仲睦まじい姿を多くの方が眼に留めておられると思う。本来お二人に賞を差し上げるのが筋かも知れないと思い、あえて表題には河野幹司・省子夫妻とした次第である。

昭和30年度園芸学部の卒業生は、アルファ会と名づけた親睦クラス会をもっており、その会報も今年で28号となっている。その中の高野君の近況を見ると、



懇親会で挨拶される河野幹司氏

「暇をつくっては近郊の山歩き、年2~3回は海外のトレッキング、サボりながらのランニング等々が変化のなくなった日々のスパイスです。今年（H15年）6月にエベレスト東側の谷へ花を見に行く予定がSARSのため中止。代わりに出かけたパキスタンの氷河歩きの旅は、2つの氷河を結ぶ130kmに及ぶ長大なトレッキングで、かなり危険で苦しい旅でした。だが、5,100mの雪と氷のヒスパー峠を越えて、多くの高山植物とも出会う楽しい旅でした。当方ヒマラヤ通いは止められません。最近になって、元気な人はいつも未来に対して具体的な夢と目標をもっているということに気づきました。幾つまで頑張れるかなと思い始めたら駄目なようです。限界を意識せず、目標をもとうと思います」とあった。

人生経験のつもりの松戸二中の教育実習が楽しく、これこそ我が一生の仕事とほれこんだのが教員の始まりとなった由。理科部の子供たちと山野を駆け巡り、県の科学展で金賞、特別賞を受賞したり、教員生活中最も生き生きとした時代があった。

次いで中堅といわれた世代、学級経営・教育評価等の研究に目を向け、校内研修に努力した日々は充実した時期であった。

新設の里中学校に転任。やる気満々で全力で学校づくりに励み、教頭になり、ついで八幡木中学校校長として栄転。しかし経営として乏しい予算・給食、国旗・国歌の問題等、厳しい日々が続く。これを乗り越えて、最初に赴任した鳩ヶ谷中学校校長として転勤。これは本来楽しいはずが、問題を抱えた学校で、悪戦苦闘の毎日であった。

以上から、中学校とはいえ一つの会社としての仕事と全く同じ経験をされ、この経営を成功された結果を生み出したと考えられる。子供の教育がいかに大切か、親が子供に対してどのような教育をしているのか、つくづく思い知らされる河野君の仕事である。最も大切な小学校から、義務教育最後の中学校でいかに指導し、その基礎に立って、将来に向けて羽ばたく人をつくった河野ご夫妻に心からエールを送りたい。

.....

## 人につくし、産地を育てる人 原 幹博氏

村井 千里

### 原 幹博氏略歴

昭和14年12月18日生まれ  
 昭和33年3月 愛知県立一宮高等学校卒業  
 昭和37年3月 千葉大学園芸学部卒業  
 名古屋大学農学部園芸教室（教務員）を経て  
 昭和45年5月 愛知県農業総合試験場園芸研究所  
 花き研究室技師  
 昭和49年4月 同上 普及指導部専門技術員（花き）



懇親会で挨拶される  
原 幹博氏

昭和57年4月 農水省野菜試験場施設栽培部  
花き栽培研究室室長  
 昭和61年4月 愛知県農業総合試験場普及指導部  
専門技術員（花き）  
 平成2年4月 同上 園芸研究所花き研究室室長  
 平成6年4月 同上 花き研究所所長  
 平成10年4月 同上 副場長  
 平成11年4月 同上 場長  
 平成12年3月 愛知県退職  
 平成12年4月 J A 愛知経済連園芸部花き課  
技術主管 現在に至る

原さんは、現在は愛知経済連の花の技術主管として、親子三代にわたる生産者と交流され、私達技術屋にとって“羨ましい”毎日を送っておられます。

略歴を見てもお分かりの通り、名古屋大学園芸教室（洋ランの無菌発芽の研究）、愛知県農業総合試験場花き研究室（キクの周年生産技術の確立、ウイルスフリー化の研究）に従事し、理論と実際が一致しない農業生産技術の問題点の解明に正面から取り組まれました。

生産者の一人ひとりとう交流し、現地を見、問題点を分析してその解決にあたり、生産者の信頼を得、生産意欲を高揚されました。

専門技術員に34歳でなられ、武豊町のカーネーション二峯団地の育成に成功されたのも、研究室時代に培った、人に尽くし、産地を育てるという姿勢からの結果でしょう。原さんのこの姿勢は農水省野菜試験場栽培部の室長、愛知県総農試に戻られてからの花き研究所設立、初代花き研究所長、総農試副場長、場長時代の部下を育て、生産者の支援の多い試験場として成果を挙げる、ということに成功された基であろうと推想しています。また、いまだに生産者に慕われるよき指導者として、現役を続けられるのも当然のこと。ますますのご活躍を願っております。

.....

## 植物園の発展に貢献した 高林成年氏

長岡 求

### 高林成年氏の略歴

昭和15年7月16日 静岡県浜松市生まれ

昭和38年3月 千葉大学園芸学部園芸学科卒業  
 昭和40年3月 京都大学大学院農学研究科修士課程修了  
 同年 京都大学農学部助手  
 同年 京都府立植物園 温室係員として、熱帯、  
 亜熱帯植物の収集・調査・保存・育成管理、  
 園芸の普及・啓蒙に努める  
 平成5～12年 京都府立植物園園長  
 平成7～10年 〇日本植物園協会副会長  
 平成10～12年 〇日本植物園協会会長  
 平成12年 京都府立植物園退職  
 平成12～16年 大阪テクノホルティ園芸専門学校校長  
 平成13年～ 高知県立牧野植物園評議委員  
 平成15年～ NPO法人 京の園芸福祉研究会 副理事長  
 平成16年～ 大阪テクノホルティ園芸専門学校  
 名誉校長・顧問

**著書**

- ・「四季池坊いけばな花材事典夏・秋」講談社 共同監修 (2004年)
- ・「山溪カラー名鑑 観葉植物」山と溪谷社 監修・著 (1997年)
- ・「覚えたい観葉植物のテクニック」NHK出版 共著 (1994年)
- ・「園芸植物大辞典」小学館 分担執筆 (1994年)

**海外調査**

- ・1980年 イギリス、オランダ、スイス、デンマーク、  
ドイツ、フランス、ベルギー各国の植物園  
施設調査
- 1992年 ウガンダ共和国へ、植物調査
- 1997年 中華人民共和国へ、植物調査
- 1998年 ブラジル連邦共和国へ、植物調査
- 1999年 南アフリカ連邦共和国へ、植物調査
- 2000年 ベリーズ国へ、植物調査

高林成年氏は千葉大学卒業後、京都大学の修士課程に進み、京都府立植物園に勤務。亜熱帯から熱帯植物といった温室植物の収集や保存、管理全般を担当。平成5年には植物園長に就任されたが、その前年にオー

ブンした観覧温室と植物園会館は氏の貢献によるところが大きい。観覧温室は植物の種類のはやうに及ばず、原生地やその生態を意識した区分けに従って植栽がなされ、植物の維持管理も卓越しており、現場を知る高林氏ならではの展示である。また、植物園会館は展示会を開催する展示室、園芸書やビデオブースを備えた園芸サロン、100席を超えるレストランなどの施設からは、来園者の利便性を意識していることが窺い知れる。

植物園長に就任した2年後の平成7年からは〇日本植物園協会の副会長、会長を歴任し、また熱帯各地の植物調査にも参加するなど、植物園業界の発展に寄与し、京都府立植物園を退職後は大阪テクノホルティ園芸専門学校の校長を務めるなど、後進の指導にも貢献されてきた。また、氏は温室植物のスペシャリストとしても著名で、多くの書籍・雑誌に執筆や寄稿を行い、その啓蒙や普及に努められた。

現在は大阪テクノホルティ園芸専門学校校長も退職し、すべての公職を離れ、ときどきNPO法人京の園芸福祉研究会におけるボランティア活動や講演、大阪テクノホルティ専門学校の授業など、ゆっくりしているとおっしゃっているが、未だに植物園について熱弁を振るうことが多く、その思いの深さが推測される。



花葉会賞を贈呈される高林成年氏



## 明日の園芸を創るパイオニア

(株)ハーベストガーデンシステムズ  
 〒156-0044 東京都世田谷区赤堤1-18-23  
 代表取締役 松田 一良  
 TEL 03-3425-8987 FAX 03-3425-8953

# 植物園人生を振り返って

高 林 成 年

本日はありがとうございました。

園芸化される前の珍しい植物をいろいろ集めてきましたので、京都植物園のアピールを兼ねて、植物のライドを見ながらお話をしてみたいです。

**Adansonia digitata** (17:30、18:00、18:54、19:20、19:35、19:50、翌8:30、10:00) セネガルから来たバオバブの木です。夜咲くので開花はなかなか見られません。夕方5:30は蕾、約2時間で満開になりました。時間系列で見てください。熱帯の植物は、開花はしますがなかなか結実するまでは行きません。

**Aphelandra chamissoniana** (イエロー・パゴダ) 30年近く前ブラジルから導入。

**Aphelandra sinclairiana** 中米の原産ですが、25年位前にハワイから導入。

**Aristolochia veraguensis** 花にきれいな網目模様が入る。幹が肥大化し、幹の元のほうに花が群生。

**Aristolochia gigantea** 京都植物園が一番早く導入。蕾も面白いし、花が大きく鉢物でもよく咲きます。

**Asystasia** 属は、最近園芸鉢物で出回っています。草本ですから繁殖しやすく、周年花が咲き、利用価値があります。**Asystasia gangetica** 花色に変化が多く、沖縄では露地植え。**Asystasia intrusa** 植物園には20年近く前から。今年近くのスーパーで売られていました。**Asystasia scandens** は京都植物園のみ。

**Brillantaisia patula** 園芸界の流通には乗りませんが観賞価値があります。温室では花穂40cm、草丈2mほどです。

**Calathea crotalifera** ハワイから導入。生育場所により花色が異なります。本来は葉を楽しみますが、これは切花として利用価値があり、輸入切花として入って来るかもしれません。

**Callidandra emerginata** シンガポール、マレーシアから導入。花がコンパクトにまとまるので、小型の鉢物として日の目を見せたいと思っています。

**Campanula vidalii** (**Azorina vidalii**) 乾燥したところで育つ、風変わりな多肉小型植物。

**Chirita linearifolia** 富樫マコト氏がヒマラヤから導入、新宿御苑から小さな枝をもらって育てました。

**Chirita linearifolia** × **sinensis** 葉が大きく、花付きよく、丈夫で作りやすい。無暖房でも栽培可能。

**Cochliostema odoratissimum** ツククサ科で最

大。鮮やかな紫色で使い道が多いと思います。

**Couroupita guianensis** キャノンボールツリー。

**Crossandra pungens** 花色は数色、花つきがよく、丈夫で、コンパクト。小型草花としてよい。

**Echium wildpretii** 1980年導入。ヨーロッパの植物園で種子を頂いてきました。栽培体系を確立し、二年草として扱っています。背丈を越すほど大きくなるので、大型のイベント花壇に使いたものです。

**Echium wildpretii** 変異が出ます。花がたくさん咲き、種子は室温でも3~4年寿命があります。日本の春の花壇向きで、葉は銀葉で冬花壇を飾ります。いいものが利用されず、忘れ去られています。

**Echium candicans** 日本では大きな花穂に育たず、きれいなブルーにもなりません。

**Eremomastax polysperma** キツネノマゴ科。日本の花の中にはなかった姿です。

**Geranium maderense** ゼラニウム属の世界最大。栽培スケジュールを組めばイベントでも利用できます。

**Justicia aurea** 夏からがよい。

**Mandevilla venusta** 日本ではつる性ということが人気ですが、マンデヴィラ属は花の色合いに変化があり面白いものです。

**Pseuderanthemum tuberculatum** この属の中では唯一、木ではなく草本です。

**Welwitsia mirabilis** (奇想天外) 1970年に種を蒔き、19年目に花が咲きました。花序は8cmくらい。種子もたくさんできました。

最後に、植物園の現在を見てほしいと思います。日本の植物園は非常な危機に面しています。特定管理者制度の推進で、官から民へ移行されようとしています。行政の方針として、開かれた植物園にし、投資効果を考えよともいわれ、収益を上げるための努力が要求されます。

行政のトップは長い目で見、園芸文化(人間性)を高めるための植物園の役割を考えてほしいと思います。植物園は短期的に見ると閉鎖的ですが、かたくなに植物を守る施設があってもよいのではないのでしょうか。長い目で見ると必要な施設であり、園芸界のためにもなると思います。植物園がなくなることがないように、運営を考えてほしいのです。今後も植物園に目を向けて行きます。 (文責：編集部)

## 花葉会基金への献金のお願い

花葉会は、会員相互の親睦、研鑽と情報交換を図ると共に、花卉園芸界の発展に寄与することを目的とし、総会、親睦会、研究会、会報、名簿等の発行、功労者の表彰等の事業を行っています。

おかげさまで、多くの方々からのご支援・ご協力により、上記の事業をどうにか円滑に運営しております。情報化の時代に対応すべく、花葉会ホームページもリニューアルいたしました。

さて、会報「花葉」創刊号等でお願いました花葉会基金は、23年目を迎え、平成16年3月現在、2,500万円を越えました。しかし、昨今の低金利の状況では、花葉会がさらに発展し、花葉会の目的を推進するための事業を展開し、情報の収集・交換などにより後輩の育成を行うには、この花葉会基金の充実をさらに図ることが必須であります。

是非、花葉会の趣旨に賛同していただき、献金をお願いしたいと存じます。ご協力のほどよろしくお願いたします。

なお、ご送金につきましては、通信欄に「花葉会基金」と明記の上、

**郵便振替：東京5-13341 花葉会** をご利用ください。

**花葉会幹事一同**

お問合せ：「花葉会」事務局

〒271-8510 松戸市松戸648 千葉大学園芸学部花卉園芸学研究室内  
TEL: 047-308-8810

## 編集後記

地震・台風の被災地の皆様にはお見舞申し上げます。皆さんにホットな情報をお届けしたくて、浜名湖花博の最前線で活躍中の方々に原稿執筆をお願いしました。会期終盤のお忙しい中、どうにか間に合わせていただき、感謝しております。花博の来場者は540万人。花博を契機に、また、何らかの新しい“花”が花卉園芸業界に咲きますように……。

花葉会ホームページがリニューアルしました。「我が社の新商品」紹介のコーナーもあります。ご利用ください。http://www.kayoukai.net/ 『花葉』は会員相互の情報交換の場であり、外へ向けての情報発信の場でもあります。花にかかわる皆様の情報をお寄せください。花葉会事務局宛、または E-mail:flower@mua.biglobe.ne.jp へ。 (山田 幸子)

花葉 2004 No.23  
平成16年12月10日発行

発行人 安藤 敏夫  
編集人 山田 幸子  
発行所 花葉会

〒271-8510 松戸市松戸648  
千葉大学園芸学部  
花卉園芸学研究室内  
編集 2フロールプランナーズチーム  
写植・印刷 1 インタクション

21世紀は  
もっと緑豊かな地球にしたい

横浜植木株式会社

花商貿易部 〒232-0934 横浜市南区唐沢15番地  
TEL (045)262-7413 FAX (045)261-7495



取扱い品目 球根類 ●ハイブリッドユリ ●チューリップ ●フーリア ●アリス ●カラー ●サンダーソニア など  
苗 ●アルストロメリア ●ガーベラ ●デルフィニウム ●アンズリウム など